

盲目物語（谷崎潤一郎）

わたくし生国は近江のくに長浜在でござりまして、たんじようは天文にじゅう一ねん、みずのえねのとしてござりますから、当年は幾つになりますやら。左様、左様、六十五さい、いえ、六さい、に相成りましょうか。左様でござります、両眼をうしなしましたのは四つのととき申すことでござります。はじめは物のかたちなどほのく見えておりまして、おうみの湖の水の色が晴れた日などにひとみに明う映りましたのを今に覚えておりますくらい。なれどもそのうち一ねんとたぬあいだにまったくめしいになりました。かみしんじんもいたしましたがなんのきゝめもござりませなんだ。おやは百姓でござりましたが、十のとしに父をうししない、十三のとしに母をうしのうてしましまして、もうそれから申すものは所の衆のなさけにすぎり、人のあしこしを揉むずべをおぼえて、かつく世過ぎをいたしております。とこうするうち、たしか十八か九のとしてござりました、ふとしたことから小谷のお城へ御奉公を取り持つてくれるお人がござりまして、そのおかたの肝いりであの御城中へ住み込むようになったのでござります。

わたくしが申す迄もない、旦那さまはよう御存知でござりましょうが、小谷の城と申しましたら、浅井備前守長政公のお城でござりまして、ほんとうにあのお方は、お歳は若うてもおりっぱな大将でござりました。おんち、下野守久政公も御存生でいらっしやいまして、とかくお父子の間柄がよくないと申す噂もムりましたけれど、それもとくは久政公がお悪いのだと申すことで、御家老がたをはじめおおぜいの御家来衆もたいがい備前どの、方へ服しておら

れたようでござりました。なんでも事のおこりというのは、長政公が十五におなりになったとし、いろいろ二ねんしょうがつと云うのに元服をなされて、それまでは新九郎と申し上げたのが、そのときに備前のかみながまさとお名のりなされ、江南の佐々木拔関齋の老臣平井加賀守どの、姫君をお迎えなされました。ところが此の御縁組みは長政公の御本意でうて、久政公が云わば理不尽におしつけられたのだと申すことでござります。下野どの、お考では、江南と江北とは昔からたびくいくさをする、今はおさまっているようなれどもいつまた合戦がおこらないとも限らないから、和議のしるしに江南とこんいんを取りむすんだら、ゆくすえ国の乱れるうれいが無いであろうと、左様に申されるのでムりましたけれど、備前守どののは佐々木の家臣の智となると云うことをどうしてもおよろこびになりませなんだ。しかし父御のおいいつけでござりますから是非なく承引なされまして、ひらい殿のひめぎみを一たんはおもらいになりましたもの、そのうち江南へ出むいて加賀守と父子の盃をしまれと云う久政公の仰せがありましたとき、これはいかにもむねんだ、父のめいをそむきかねて平井ふぜいのむこになるさえくちおしいのに、こちらから出かけて行つておやこのけいやくをするなど、は以てのほかだ、弓馬の家にうまれたからは治乱の首尾をうかづって天下に旗をあげ、やがては武門の棟梁ともなるように心がけてこそ武士たるもの、本懐だのにと仰っしやって、とうくその姫ぎみを、久政公へは御そう談もなしに里へかえしておしまいになりました。それはまあ、あまりと申せば乱暴な仕方です、てごの御腹立なされましたのも御尤もではござりますけれども、まだ十五六のおとしごろでそういう大きなころざしを持つていらつしやると云うのは、いかにも尋常なお方でない、浅井の家をおこ

された先代の亮政公に似かよつて、うまれながらに豪傑の氣象をそなえていらつしやる、こういう主君をいたゞけばお家の御運は万々代であらう、まことにあつぱれなお方だと、御家来しゅうがみな備前どの、御器量をおしたい申して、てゝこの方へは出仕するものもないようになりましたので、ひさま公もよんどころなく家督をびぜんのへおゆずりになりましたて、ごじしんは奥方の井の口殿をおつれになつて、竹生島へこもつていらしたこともあるそうでござります。

けれどもこれはわたくしが御奉公にあげりました以前のことでござりまして、当時は父子のおんなかもいくぶんか和ぼくなされ、下野どのものくちどのもちくぶ島からおかえりになりましたて、お城でくらしでいらつしやいました。長政公は二十五六さいのおとしでござりましたろうか、もうそのときは二度めの奥方をおむかえになつていらつしやいましたが、そのおくがたと申されますのが、もつたいなくも信長公のおん妹君、お市どのでござります。この御えんぐみは信長公が美濃のくにより御上洛のみぎり、いま江州できりよのすぐれた武将と申せば、歳はわかくてもあさいびぜんのかみに越すものはあるまじ、ひとえに味方にたのみたいとおぼしめされて、なにとぞわが縁者となつてくれぬか、それを承引あるうえは浅井と織田とちからをあわせて観音寺城にたてこもる佐々木六角を攻めほろぼして都へ上り、ゆく／＼は天下の仕置きも兩人で取りおこなおう、みの／＼にも欲しくばそちらへ進ぜよう、またえちぜん^{越前}の朝倉は浅井家とふかい義理のある仲だから、決して勝手に取りかゝるようなことはしませぬ、越前一国はそちらの指図通りと申す誓紙を入れようなどゝ、それは／＼御ていねいな言葉がござりましたので、その儀ならばと申すことで、御縁がまとまったのでござります。

それにつけても佐々木の家臣の姫君をおもらいなされて拔関齋の下風にお立ちなさるところを、きつくおことわりなされたばかりに、当時しよこくを切りなびけてとぶとりをおとす信長公からさほどまでにお望まれなされ、織田家のむこにおなりなさろうとは。それもまあ、武略がすぐれていらした故とは申しながら、人は出来るだけ大きな望みを持つべきものでござります。不縁におなりなされた前のおくがたは、ものゝ半年と御一緒におくらしはなかつたそうで、そのおかたのことは存じませぬが、お市御料人はまだお輿入れにならぬうちから世にも稀なる美人のきこえの高かつたお方でござります。御夫婦なかもいたつておむつまじゅうござりまして、お子たちも年子^{としこ}のようにお生れなされて、もうそのときに、若君、姫君、とりまぜて二三にんはいらつしやいましたかと存じます。いちばんうえの姫君はお茶々どのと申し上げて、まだいたいけなお児でござりましたが、このお児が後に太閤殿下の御ちようあいをおうけなされ、かたじけなくも右だいじん秀頼公のおふくろさまとおなりなされた淀のおん方であらせらりようとは、まことに人のゆくすえはわからぬものでござります。でもお茶々どのはその時分からすぐれてみめかたちがおうつくしく、お顔だち、鼻のかっこう、めつきくちつきなど奥方に瓜二つだと申すことで、それは盲もくのわたくしにもおぼろげながらわかるような気がいたしました。ほんとうにわたくしふぜいのいやしいものが、なんの冥加^{みょうが}であ、云うとうといお女中がたのおそばちこう仕えますことができましてのやら。はい、はい、左様でござります、まえにちよつと申し上げるのをわすれましたが、最初はわたくし、さむらい衆の揉みりょうじをいたすいうことでござりましたけれども、城中たいくつのおりなどに、「これ、これ、坊主、三味せんをひけ」と、みな衆

に所望されて、世間のはやりうたなどをうとうたことがござりますので、そんな噂が御簾中へきこえたのでござりましょう、唄の上手なおもしろい坊主がいるそうなが、いっぺんその者をよこすようにとのお使いがござりまして、それから二三ど御前へうかがいましたのがはじまりだったのでござります。はい、はい、いえ、それはもう、あれだけのお城でござりますから、武士の外にもいろいろのひとが御奉公にあがっております、猿楽の太夫なども召しかゝえられておりましたので、わたくしなどが御きげんを取りむすぶまでもござりませぬけれども、あゝ云う高貴なお方には却つてもござまのはやりうたのようなものがお耳あたらしいのでござりましょう。それにそのころはまだ三味線がいまのようにひろまっておりますんで、ものずきな人がぼつ／＼けいこをするというくらいでござりましたから、そのめずらしい糸のねいろがお気に召したのでござりましょう。さようでござります、わたくし、このみちをおぼえましたのは、べつにさだまった師しようについたのではござりませぬ。どういうものか生来おんぎよくをきくことをこのみ、きけばじきにそのふしを取つて、おそわずともしぜんにうたいかなでるという風でござりまして、しゃみせんなぞもたゞおり／＼のなくさみにもあそんでおりましたのが、いつしか身についた能となつたのでござります。なれどもゝとよりしろうとの手すさびでござりまして、人にきいていたゞくほどの芸ではござりませなんだのに、つたないところがあいきようになりましたものか、いつもおほめにあずかりまして、お前へ出ますたびごとにけつこうなかつけ物を下されました。まあその時分は、戦国のことゝて彼方此方にかつせんのたえまはござりませなんだが、いくさがあればそれだけにたのしいこともござりまして、殿様が遠く御出陣あそばしていらつしや

いますと、お女中がたはなんの御用もないものですから、つい憂さはらしに琴などを遊ばしますし、それから又、ながの籠城のおりなどは気がめいつてはならぬと云うので、表でも奥でも、とき／＼にぎやかな催しがあつたりいたしまして、そう今のひとが考えるほどおそろしいことばかりでもござりませなんだ。とりわけおくがたは琴をたんのうにあそばしまして、つれ／＼のあまりに掻きならしていらつしやいましたが、そう云うおりにふとわたくしが三味線をとつて、どのような曲にでもそくざにあわせて弾きますと、それがたいそう御意になつたとみえまして、器用なものじやと云うおことばで、それからずつと奥むきの方へつとめるようになりました。お茶々どのも「坊主、坊主」とまわらぬ舌でお呼びになつて、あけくれわたくしを遊び相手になされまして、「坊主、瓢箪のうたをうたつておくれ」と、よくそんなことを仰つしやつて下さりました。あゝ、そのひょうたんのうたと申しますのは、

忍ぶ軒端に

瓢たんはうゑてな

おいてな

這はせてならすな

こゝろにつれてひよく／＼

ひよく／＼めくに

と、こう唄うのでござります。

あら美しの塗壺笠や

これこそ河内陣みやげ

えいころえいと

えいころえとな

傷口がわれた

心得て蹈^ふまへて

とら

えいとうえいと

えいとうえとな

まだこのほかにもいろいろあったのでござりますが、ふしはおぼえておりまして、詞^{ことば}をわすれてしまひまして、いやもう年をとりますとたわいのないものでござります。そうするうちに信長公と長政公と仲たがいをなされまして、両家のあいだにいくさがはじまりましたのは、あれはいつごろでござりましたか。あゝ、姉川^{あねがわ}の合戦が、元龜がなんでござりますか。こういうことは旦那さまのようにも、本を読んでいらつしやるおかたの方がよく御存知でござります。なんでも御奉公に出ましてから問もないこととござりまして、不和のおこりと申しますのは、のぶながが浅井どのへおことわりもなしに、えちぜんの朝倉どの、領分へおとりかけなされたのでござります。いったい浅井のお家と申すのは、先々代すけまさ公のとき、あさくらどの、加勢によって御運をおひらきなされまして、それ以来あさくらどのには恩ぎをうけておられます。さればこそ織田家と御えんぐみのときにも越前のくに、は手をつけぬと、信長公よりかたいせいしをおとりになったのでござりましたが、わずか三ねんとたうないうちにたちまち誓紙をほごにして、当家へいちごんのあいさつもなく手入れをするとはけしからぬ、信長という奴は輕薄ものだと、だいに御隠居の下野どのが御りつぷくで、長政公の御殿へおいでになりまして、近習^{きんじゅう}とさまの者までもおあつめになつて、のぶながの奴、いまにえちぜんのくのに堅固なあいだに、朝倉と一味して信長を討ちとつてしまわねばならぬと、えらいけんまくでござり

ましたところが、長政公もごけらいしゅうも、しばらくはことばもござりませなんだ。それはまあ、やくそくをほごにすると言うのは信長公もわるうござりますけれども、あさくらどのも両家のあいだにやくそくのあるのをよいことにして、織田家へぶれいなしうちをしっている。ことに信長公たびくの御上洛にもかゝわらず、一ども使節をさし上げられたこともないので、それでは禁裏^{きんり}さまや公方^{くぼう}さまにも恐れ多い。しよせん織田どのを敵にまわしてはたとい朝倉と一つになつても打ちかつ見込みはござりませぬから、いまの場合はいちぜんの方へ申しわけに千人ばかりも加せいを出して、織田家の方はなんとか巧^{うま}くつくろつておいたらいかゞでござりますと、そう申す人たちが多いのでござりましたが、それをきかれると御いんきよはなお怒^{おこ}られて、おのれら、末座のさむらいとして何を申す、いかに信長が鬼神なればとて、親の代からの恩をわすれ、あさくら家の難儀をみすて、よいとおもうか、そんなことをしたら末代までの弓矢の名折れ、あさい一門の耻辱ではないか、わしはたった一人になつてもさような義理^{ぎり}しらずのおくびょうもの、真似はせぬと、まんざをねめつて威丈^{いたけ}だかになられますので、まあ、そう御たんに仰せられずによく、御分別なされましてはと、老臣どもが取りつきまして、おのれら、みなが此の年寄りを邪魔にして、皺腹を切らせるつもりじやなど、身をふるわせて齒がみをなされます。総じて老人と云う者は義理がたいものでござりますから、そう仰^おつしやるのも一往はきこえておりますけれども、まあ、から家来どもがじぶんをばかにするという僻^{ひが}みをもつていらつしやるところへ、長政公がせっかく自分の世話してやった嫁をきらつてお市どのを迎えられたということを、いまだにふくんでいらつて、それみたことか、おやのいいつけをそむいたればこそこんな仕儀に

なつたではないか、この期におよんであのうそつきの信長になんの遠慮をすることがある、こうまであなどられながらだまって引ッ込んでいゝというの、おかた女房のかあいさにほだされて、織田家へ弓がひけぬとみえた、と、いくぶんか長政公へあてつける気味もあつたのでござります。びぜんのかみどのは御いんきよと御けらしゅうとのあらそいを無言できいていらして、そのときにほつとためいきをなされ、なるほど、ちうえの仰せはお道理じゃ、自分のはぶながの賀だけれども先祖以来の恩にはかえられぬ、こちらへ取つてある誓紙は明日さつそく使者にもたせて織田家へかえしてしまひましよう、信長いかに虎狼のいきおいにほこつておつてもえちぜんぜいと力をあわせて無二の一戦をいたすならば、やわか彼を討ち取れぬことがござらうぞと、きっぱりと仰せになりましたので、そのうゑは仕方なく、みなが決心をかためたのでござります。しかしそのうちも、いくさ評定のたびごとに御いんきよとながまさ公との御料簡がちごうて、とかくしつくりいかなんだようでござりました。ながまさ公は名将のうつわでいらつしやいますし、ゆうきりんくたる日ごろの御きしやうでござりますから、出足のはい信長をてきに廻してこゝゆるくとしていてはならぬ、こちらから逆にせめのぼつて一とかっせんした方がよいと、そう云うおかんがえでござりましたけれども、御いんきよは年よりのくせで、なにことに大事をとらうとなされますので、かえつて不利をまねくようになりました。信長公がえちぜんから都へ引きとられましたときに、此のあいだに朝倉せいと一手になつて、美濃へきり込んで、岐阜をせめおとしてしまおう。さすれば信長さつそくに馳せくだらうとするであらうが、江南には佐々木ろつかくの一族がいるからやすく通すはあまいし、そのまに岐阜から取つてかえ

して、佐和山おもてにまちかまえてかつせんすれば、のぶながのくびはわがものになると、長まさ公がごふんべつをめぐらされ、あさくらどのへ使者をおつかわしになりましたけれども、一乗の谷の館にもやはり気ながな人たちがそろつていまして、はるぐみのへ出かけていつてあとさきを敵につゝまれたら難儀にならうと、義景公をはじめだれも同心するものがござりませなんだ。それで御返事には、いや、それよりも、いづれ信長が小谷のお城へおしよせてまいりましようから、そのとき当国にんずをもよおしてお味方に参じましよう、と、そういうごあいさつでござりましたので、あたうけいりやくがむやくになつたのでござります。長政公はそのへんじをきかれると、あゝ、朝倉もそんな悠長なことを申しておるのか、それで義景のじんぶつもわかつた、そのようなろまなことであればしつこい信長に勝つみこみなど、十に一つもあらうとはおもわれぬ、父上の仰せがあつたばかりによしない人に組みしたのが運のつきだと、しみぐ述懐あそばしたそうでござりますが、もうそのときから浅井の家もわがいのちも長いことはあるまいと、かくごをきめられたらしゅうござります。

それから姉川、さかもとの合戦がござりまして、いちどは扱いになりましたけれども、たちまち和議もやぶれてしまひまして、織田せいのためにじりくくと御りょうぶんを削られてゆきました。まことに名将の仰つしやつたことにまちがいはなく、長政公のおことばがおもいあたるのでござります。わずか二三ねんのあいだに、佐和やま、よこやま、大尾、あさづま、宮部、山本、大嵩の城々をおいぐにせめ抜かれて、小谷の本城ははだか城にされ、その麓まで敵がひしくと取りつめてまいつたのでござります。よせては六万余騎のぐんぜいをもって蟻のはいでるすきまもなく十重二十重に打

ちかこみ、のぶなが公をそうだいしようとして、柴田しゆりのすけ、にわ五郎ざえもん、佐久間うえもんのじょうなど、きこゆるゆうしが加わっております。太閤でんかも当時は木のした藤きちろうと申されて、おしろから八丁ばかりの虎御前山にとりでをきずいて、城内のようすをうかづっておられました。あさいどの、御けらいにもずいぶんりっぱな大将たちがおられましたけれども、これはとたのみきつたる者もころがわりがいたしまして、だんく織田どのへ降人に出まして、味方のいきおいは日にまし弱るばかりでござります。おしろの中は、人質のおんな子供をとりこめてありますし、ほうぐの小城から落ちてまいった侍どもがおりますし、つねよりもおおぜいの人数でござりましたから、さいしよはなか／＼気が立つております。『憂きも一と時うれしさも思ひさませば夢候よ』と、小唄まじりに日ごと夜ごとのせりあいをつづけておりましたが、そのうちに、御いん居ひさま公の丸と長政公の丸のあいだの、中の丸をあずかつておられた浅井七郎どの、おなじく玄蕃のすけどのなどが、藤吉郎どのにないつつうしまして、てきをその丸の中へ引き入れましたので、俄かにじょうちゅうが火のきえたようになりました。そのときのぶなが公のお使者がみえて申されますのに、その方と仲たがいをしたというのも元はいえは朝倉のことからだ、しかしこちらはすでに越前をきりなびけ、義景をうちとてしまったから、その方にたいしなんの意趣をもいだかぬし、又そのほうもこのうえ義理をたてるところもないであろう。しろをあけわたして立ちのくならば、えんじやのよしみもあることだからこちらも如在には存ぜぬ、このゝち織田家のきかにぞくして忠節をぬきんでゝくれるなら、大和一国をあておこのうてもよいとおもうがと、ねんごろな御説でござりました。おしろの中ではよいところへ扱いが

はいったと云つてよろこぶ者もあり、いや／＼、これは織田どの、ほんしんではあるまい、妹御のおいちどのを助けだしておいてから、殿にお腹をめさせようと云う所存であろうと申す者もあり、評議はまち／＼でござりましたが、ながまさ公は使者にたいめんあそばして、おころざしのほど忝く存じますけれども、かようになりはて、何を花香と世にながらえましよう、たゞ討死をとげるつもりでござりますから、御前へよきなにお伝え下されと仰っしゃつて、いっこうに承引なされませなんだ。のぶなが公は、さては自分を疑うとみえる、こちらはしんじつに申すのだから、ぜひ討死をおもいとまつて、こころやすく立ちのくようにと、さいさん使者をよこされましたが、いったん覚悟をきわめたうえはと、いかに申されてもおおき／＼入れがござりませなんだ。それで、八月二じゅうろくにちの宵に、御菩提寺の雄山わじょうをおまねきになりました、小谷のおくの曲谷のいしきりに石塔をお切らせになり、徳勝寺殿天英宗清大居士とかいみょうをえりつけられ、その石とうのうしろをくぼめて御自筆の願書をおこめになりました。それから二十七日のあさはやくろうじょうの侍どもをおあつめになり、ゆうざんわじょうを導師にたゝせて、長政公はせきとうのそばにおすわりなされ、御けらいしゅうの焼香をおうけになりました。みなやしゅうはさすがに辞退されましたけれども、たつてのおことばゆえ焼香したのでござります。さてその石とうは、しので城からはこび出しまして、みずうみのそこふかく、竹生しまから八丁ばかりひがしの沖へしずめましたので、それを見ました城中のものどもは一途に討ちじに心をかけるようになったのでござります。

おくがたはちようどそのとしの五月に若君をおうみなされ、さんごのおつかれで一と月あまりひきこもつていらっしやいましたので、

わたくしがしづゆうごかいほう申し上げ、お肩やお腰をさすりま
たり、せけんばなしのお相手をつとめましたりいたしまして、おな
ぐさめ申しております。左様でござります、ながまさ公は御きし
ようはたけくいらつしやいましたが、おくがたにはいたつておやさ
しゅうござりまして、ひるはいちにち命をまとはげしい働きをな
さりながら、おくごてんへおこしになりますと御きげんよく御酒
をきこしめされ、何くれとおくがたをいたわつてお上げなされて、
お女中がたやたくしどもへまでじようだんを仰つしやつたりしま
して、いくまんの敵がしろのぐるりをかこんでいることもとお
心にとまらぬようでござりました。なにぶん大名がたの御夫婦仲の
ことは、おそばにつかえております者にもなか／＼わかりかねます
けれども、おくがたはおん兄君と殿さまのなかにはさまれて胸をい
ためていらしたのでござりましようし、ながまさ公の方はまた、
それをいとおしゅう、いじらしゅうおぼしめされ、かたみのせまい
おもいをせぬようにと、つとめておくがたの気をひきたて、いらし
ったのではござりますまいか。そう云えばあのじぶん、御前にひか
えておりますと、「これ坊主、三味せんも／＼面白くない、酒のさ
かなにもつとうきくしたことはないか、あの棒しばりを舞つてみ
せぬか」など、殿のおこえがかゝりまして、

十七八は

竿にほした細布

とりよりや

いとし

たぐりよりや

いとし

糸よりほそい

腰をしむれば

たんとなほいとし

と、つたないまいをごろんにいれては御座興をつとめたものでござ
ります。それはわたくし、じぶんでかんがえ出しました道化^{どうけ}た
いでござりまして、「糸よりほそい腰をしむれば」と、所作^{しよさ}をして
おめにかけますと、たいていのかたは腹をかゝえてわられますの
で、めくらのくせに妙なてつきで舞いますところがおかしみなので
ござりましたが、なみいるかたぐの賑やかなおこえにまじつて、
おくがたのおわらいなさるおこえがきこえますときは、「あゝ、す
こしはごきげんがよいのだな」とおもひまして、どんなにわたくし
も勤めがいがりましたことか。なれどもたいへん悲しいことには、
おい／＼日がたつにつれまして、いくらわたくしが新しい手をかん
がえましておもしろおかしくまつてごろんにいれまして、「ほゝ」
とかすかにえまれるばかりで、やがてそれさえもきこえないことが
おおくなつてまいりました。

あるひのこと、あまり肩がこつてならぬから、すこしりようじをし
てほしいと仰つしやいますので、おせなかの方へまわりまして揉ん
でおりますと、おくがたはしとねのうえにおすわりなされ、脇息^{きょうそく}
におよりあそばして、うつらく／＼まどろんでいらつしやるのかと思
われましたが、そうではなくて、とき／＼ほつといきをついてい
らつしやいます。こういうおりに、いぜんにはよくお話相手をいた
しましたのに、ちかごろはめったにお言葉のさがることなどもござ
りませんので、たゞかしこまつてりようじをいたしておりますだけ
れども、それがわたくしにはなんとのう氣づまりでなりませなんだ。
ぜんたいめしいと申すものは、ひといちばいかんのよいものでござ
ります。ましてわたくしは、ひごとよごと奥がたのあんまを仰せつ

かりまして、おからだの様子がおおよそ分っておりますので、おむねのなかのことまでがしぜんと手先へつたわってまいりますまいか、だまって揉んでおりますうちに、やるせないおもいがいっぱいにこみあげてまいるのでござります。当時おくがたは二十をふたつみつおこえなされ、四人にあまるお子たちの母御でいらつしやいましたけれども、根がおうつくしいおかたのうえに、ついぞいまでは苦勞という苦勞もなされず、あらいかぜにもおあたりなされたことがないのでござりますから、もつたいないことながら、そのにくづきのふつくらとしてやわらかなことゝ申したら、りんずのおめしものをへだてゝ揉んでおりますも、手ざわりのぐあいがほかのお女中とはまるきりちがつておりました。もつともこんどは五たびめのお産でござりましたから、さすがにいくらか寝れていらつしやいましたものゝ、おやせになればおやせになるで、その骨ぐみの世にたぐいもなくきやしゃでいらつしやることはおどろくばかりでござりました。わたくし、じつに、このとしになりますまで、ながねんのあいだもみりようじを渡世にいたし、おわかいお女中さまがたをかずしれず手がけてまいりましたが、あれほどしなやかなからだのおかたをいろうたことがござりませぬ。それに、おんはだえのなめらかさ、こまかさ、お手でもおみあしでもしつとり露をふくんだようなねばりを持っていらしたのは、あれこそまことに玉の肌と申すものでござりましようか。おぐしなども、お産をしてからめつきりと薄うなつたと、ごじゝんでは仰つしやつていらつしやいました、それでもふさくとうしろに垂らしていらつしやるのが、普通のひとにくらべたらうつとうしいくらいたくさんにおありになって、一本々々きぬいとをならべたような、細い、くせない、どつしりとおもい毛のたばが、さらく衣にすれながらお背な

かいちめんにひろがつておりました、お肩を揉むのにじやまになるほどでござりました。なれども、このとうとい上臈のおみのうえもおしろがらくじようするときはどうなるだろうか。このたまのおんはだえも、たけなすくろかみも、かぼそいほねをつゝんでいるやわらかい肉づきも、みんなおしろのやぐらといつしよにけぶりになつてしまふのだろうか。ひとのいのちをうばうことがせんごくの世のならないなればとて、こんなたいけなおうつくしいかたをころすという法があるものだろうか。のぶなが公もげんざい血をわけたいうと御を、たすけておあげなさろうというおぼしめしはないものか。まあわたくしのようなものが、そんなしんぱいをしましたからとておよばぬこととでござりますけれども、えんあつておそばにおつかえ申し、なんのしあわせかめしいと生れましたばかりにこのようなおかたのおんみに手をふれ、あさゆうおこしをもませていたゞいておりました、たゞそののみをいきがいのある仕事とぞんじておりましたのに、もうその御奉公もいつまでだろうかとかんがえましたら、このさきなんのたのしみもなくなりまして、にわかには胸がくるしゅうなつてまいりました。するとおくがたが又ほつとためいきをあそばして、

「弥市」

と、およびになるのです。わたくし、おしろの中では、「坊主、坊主」といわれておりましたが、「たゞ坊主ではいけぬ」と仰つしやつて、おくがたから「弥市」という名をいたゞいておったのでござります。

「弥市、どうしたのだえ」

と、そのときかさねてのお言葉に、

「はっ」

と申して、おどくいたしておりますと、

「いっこう力がはいらぬではないか、もそつときつうもんでおくれ」と仰っしゃるのでござります。わたくしは、

「おそれいました」

と申しあげて、さてはいらざる取りこしくろうに手の方がおろそかになったかと、気を入れかえてせつせとんでおりました。なれどもきようはとくべつにお肩がこつていらしつて、おんえりくびのりようがわに手毬ほどのまるいしこりがおできになっておりまして、もみほごすのがなか／＼なのでござります。まあ、ほんとうに、これではさぞかしおつからう、こんなにおこりになるといふのは、きつという／＼なものとあなじをあそばして、よるもろく／＼おやすみにならぬせいではないか、おいたわしいことだわいと、お察し申しあげておりますと、

「弥市」

と仰っしゃつて、

「お前、いつまでこのしろのなかにいるつもりなのだえ」

と、仰っしゃるのです。

「はい、わたくしは、いつまでも御奉公をいたしておりますでございます。ふつ／＼かなものでござりますから、おやくにはたちませぬが、ふびんにおぼし下されまして召しつかつていたゞけましたら有りがたいことでござります」

そう申しあげましたら、

「そうかえ」

と仰っしゃつたなり、しばらくしずんでいらしつて、

「それでもお前、知つてのとおりおおぜいの者がいつのまにか一人へり二人へりして、もうおしろにはいくにんも残っていないのです

よ。りっぱな武士でさえ主^{しゆう}をみすて、おちてゆくのに、さむらいでもないものがたれにえんりよをすることがあろう。ましておまえは眼がふじゆう^{不自由}なのだから、まご／＼しているとけがをしますよ」と仰っしゃるのです。

「おおせはありますが、おしろを捨てるのもふみとゞまるのも、それはひと／＼のこゝろまかせでござります。まなこさえあいておりましたら、夜にまぎれておちのびることもできましようけれども、このように四方をかこまれておりましてはたといおいとまをいたゞきましてわたくしには逃げるみちがござりませぬ。どうせ数ならぬくら法師ではござりますが、なまなかてきにとらえられてなさを受けるのはいやでござります」

すると、なんともおことはなくて、そつとおんなみだをおふきになつたらしゅう、ふところからたとうがみをお出しになるおとがさ／＼ときこえました。わたくし、じぶんの身よりもおくがたはどうあそばすおつもりか、いずこ迄もながまさ公とごいっしよにおいであそばすのか、五人のお子たちをいとおしゅうおぼしめしたら、また御りょうけんもおありになりはしないかと、こゝろではやきもきいたしました。そんなことをさしでがましゅう伺うわけにもまゐりませぬし、それきりおこえもかゝりませぬので、ついづきほがなくて、ひかえてしまったのでござりました。

それが、あのせきとうの御供養のありました二日ほどまえのこととてござりまして、八がつ二十七日のあけがた、さむらいがたの焼香をおうけになりますと、こんどはおくがたや、お子たちや、腰元衆や、わたくしどもまでをそこへおめしになりました。「さあ、おまえたちも回向をしておくれ」と仰っしゃるのでござりました。なれどもいざとなりますと、お女中がたのかなしみは又かくべつでござりま

して、あゝ、それではいよくお城のうんめいがきわまって、の
さまはうちじにあそばすのかとどなたも途方にくれるばかりで、一
人もしやうこの席へすゝもうとはなさりませぬ。このにさんにち
寄せ手は一そうはげしくせめてまいりまして、ひるもよるも合戦の
たえまはござりませなんだが、けさはさすがに敵もいくらか手をゆ
るめたとみえまして、お城のうちもそもしんとして、大ひろまの
中は水をうったようにしずかでござります。おりふし秋もなかばの
ことでござりまして、おうみの国もほつくくにちかい山の上の、夜
もあけきらぬほどの時こくでござりますから、まつぎにひかえてお
りますと、肌さむいかぜがひえぐと身にしみ、お庭の方でくさば
にすだくむしのねばかりがじいぐときこえるのでござります。と、
ふいに広間のすみの方で、どなたか一人しくぐとすゝりなきをは
じめましたら、それまでじつとこらえていらしたおおぜいの衆が、
あちらでもこちらでも、いちどにしくぐと泣き出されましたので、
がんぜないお子たちまでがこえをあげてお泣きになりました。「こ
れ、これ、そなたはいちばんとしかさのくせに泣くということがあ
りますか、かねぐ云うてきかせたのはこのことではありませぬ
か」と、おくがたはこんなときにも取りみだした御様子がなく、し
っかりしたおこえでお茶々どのお叱りになって、嫡男万福丸どの
乳母をお呼びになりました、「さあ、和子から先にしようこうを
するのですよ」と仰っしゃるのです。それでいちばんに万福丸どの、
二ばんには当歳の若が御焼香をすまされますと、「お茶々、そなた
の番ですよ」と仰せられましたか、
「いや、姫よりもそなたはなげしないのだ」と、ながまさ公がき
つとなつて仰せられるのです。おくがたはたゞ「はいぐ」と口の
うちで仰っしゃるばかりで、なかぐ承引なされませぬので、

「あれほど申しきかせたことがなげ分らぬ。この期におよんで云い
つけにそむくつもりか」と、つねぐおくがたにはおやさしいおか
たが、ことさらあらぐしく仰っしゃるのでござりますけれども、
「おぼしめしはかたじけのうござりますが」

と、かたくけっしんをあそばして、座を立とうとはなさりませなん
だ。そのときながまさ公はだいおんをおあげになつて、

「やあ、その方おんなのみちを忘れたか。わがなきあとの菩提をと
ぶらい、子どものせいじんをみとゞけるこそ、つまたるものゝ勤め
ではないか。その道理がわからぬようではみらいえいこう妻と
はおもわぬ、夫とも思つてもらわぬぞ」

と、するどくお叱りになりました。そのおこえがひろまのすみぐ
へりんぐとひゞきわたりましたので、いちどうはつといたしまし
て、どうなることかといきをころしておりますと、しばらくなんの
ものゝすれるけはいがいたしましたのは、こゝろならずも奥がた
がごしよう香をなされたのでござりました。それから一のひめぎみ
のお茶々どの、二の姫ぎみのおはつどの、三のひめ君の小督どの
と、しだいに御えこうをなされましたので、そのよのかたぐもと
ゞこおりなく済まされたのでござります。

さてその石とうをはこび出してこすいにしずめましたことは、せん
こく申し上げたとおりでござります。おくがたはひとぐの手まえ、
いったんはおきゝいれになりましたものゝ、殿が御しようがいあそ
ばすのに、わがみひとり世にながらえてなんとしようぞ、あれこそ
浅井のにようぼうよと人にうしろゆびをさゝれるのはくちおしゆう
ござります、ぜび死出のみちづれをさせて下されと、よもすがら搔
きくどかれて、いっかな御しやういんなさるけしきもなかったそう

にござります。するとあくる二十八にちの巳みの刻ごろに、織田どのゝおんつかい不破河内のかみどのが三度目におこしになりまして、いま一ぺんかんがえなおして降人に出る気はないかと、のぶなが公のおことばをつたえましたのでござります。ながまさ公はかさねぐのおぼしめし、しょうぐ世々わすれがたくは存じますが、じぶんはどうあつてもこのしろにおいてはらを切ります、たゞし妻とむすめどもはおんなのことなり、のぶなが公にちすじのつながるものでもござれば、申しふくめてあとより送りとゞけます、せつかくのおなさにあのものたちのいのちをゆるして、あとぐのせわを見てやって下さればありがとう存じますと、いんぎんにおたのみなされまして、一とまずかわちの守どのをおかえしになり、それから又おくがたへだんぐと御いけんをなされたらしゅうござります。もとよりながまさ公とても、あれほどおむつまじいおん語らいでござりましたから、死なばもろともと覚悟をなされたおくがたのおんころねを何しに憎く思ひめしめしよう。おもえばおふたりが御えんぐみをあそばしてから、ことしで足かけ六ねんと申すみじかいおんちぎりでござります。そのあいだしゅう世の中がさわがしく、あるときはとおく都や江南の御陣へお出かけになつたりしまして、いちにちとしてあんらくにおすごしあそばしたこともないのでござりますから、おなじはちすのうてなの上でいつまでも仲よくらしたいとおのぞみになるのも、決してごむりではござりませぬ。なれどもながまさ公は勇あるおかたのつねとしてひとしおおん憐れみがふこうござりまして、おとしのわかいおくがたをむざぐころしてしまふことがあまりおいたわしく、なんとかしていのちをたすけてあげたいとおぼしめされ、ことにはお子たちのゆくすえなども御あんじあそばしたのでござりましょう。まあいろぐにしなをか

えて道理をおとぎになつたものとみえまして、ようぐおくがたも御とくしんあそばし、ひめぎみばかりをおつれになつておさとへお帰りあそばすことにきまつたのでござります。おとこのお子たちはまだいとけのうござりましたけれども、敵の手におちてはあやういと申されて、総りょうのまんぷく丸まるどのはえちぜんつるがこりのくに敦賀郡のしるべをたよりに、二十八日の夜よるおそく、きむら喜内之介と申す小姓をつけてそつとおしろからお出しになり、すえの若ぎみは、当国の福田寺へあずけられることになりまして、これもその夜のうちに、小川伝四郎中島左近と申すさむらい二人に乳母がつきそうて、ふくでん寺のちかくの湖水のきしに船をよせられ、しばらく蘆のしげみのあいだにひそんでおられたと申すこととござります。

おくがたは二じゅうはち日の夜ひとよ、ながまさ公とおんわかれの盃をおかわしになりましたが、つきぬおん名残りにさまぐのおんものがたりをあそばすうちに、秋の夜ながもいつのまにかあけてしまひましたので、それではと申されて、ひがしの方がもうしらぐとあかるい時分、おしろの門からおのりものにおめしになりました。つゞく三つのお乗りものにはさんんの姫たちが乳母とごいっしょにお召しになりました、藤掛三河守と申す、お輿入れのおり織田家からついてまいりました奥向きの御けらいが、てぜいをつれて前後をおまもり申し上げ、そのほかに二三十人のお女中がたがおともをいたして小谷をあとになされました。ながまさ公は御のりもの、きわまでおみおくりに出られまして、そのあさはもうこれを最後の御しようぞくで、くろいとおどしのおんよろいにきんらんの袈裟けさをかけていらしたそうとござります。いよくおのりものをかき上げますとき、「ではあとをたのんだぞ、たつしやでくらせよ」とおことばをおかけになりましたのがゆうきはりきつたさわやかなお

こえでござりました。おくがたも「おこゝろおきのう御りっぱなおはたらきを」と、氣じようにおっしゃって、おんなみだをおみせにならずに、じつとがまんをなされたのはさすがでござります。

すえのおふたりのひめぎみたちは西もひがしもおわかりにならぬほどでござりましたから、お乳の人の手におだかれになって、なんのことも夢中でいらつしやいましたけれども、おちやくどのはてゝこの方をふりかえりく、いやじゃくときつうおむずかりになりまして、なかくなだめすかしてもお泣きやみになりませんので、お供のひとぐはそれを見るのが何よりつろうござりました。この姫たちが三人ながらのちに出世をあそばして、お茶々どのが淀のおん方、おはつどのが京極さいしよどの、おん奥方常高院どの、いちばんすえの小督どのが忝くもいま將軍家のみだいでおわしますことを、だれがそのときおもいましたでござりましょう。かえすくも御運の末はわからぬものでござります。

のぶなが公はおいちどのや姪御たちをお受けとりになりますと、たいそうおよろこびになりまして「ようふんべつして出て来てくれた」と、ねんごろに仰っしゃって、「あさいにもあれほどことばをつくして降参をすゝめたのに、どこまでもきゝ入れないのは、あつぱれ名をおしむ武士とみえた、あれを死なすのはじぶんのほんいでないけれども、ゆみやとる身の意地であるからかんにんしてもらいたい、そなたもながのろうじょうでさぞくろうをしたことだろう」と、そこは骨肉のおんあいだがらゆえ御じょうあいもかくべつで、わけへだてないおものがたりがござりまして、すぐに織田こうすけの守どのへおあずけなされて、よくいたわつてとらせるようにとの御定でござりました。

いくさの方は二十七にちのあさからやんでおりましたが、おいちど

のをわたしたうえはもはや猶予することはない、しろをひといきにもみつぶして浅井おやこに腹をきらせるばかりだと、のぶなが公おんみずから京極つづら尾というところへおのぼりになってそうぐんぜいに下知をなされ、ひらぜめにせめおとせとおっしゃいましたので、えい、えい、おう、と、寄せ手はすさまじい闘のこえをあげて責めにかゝつたのでござります。このとき御いんきよ久政公の丸にはぞうへい八百ばかりこもっておりまして、四方の持ちくちをかためておりましたけれども、ときは眼にあまる大軍のうえに、しばた修理のすけどのがさきにたつて塀に手をかけ、ひたくと乗りこんで来られましたので、ごいんきよいまはこれまでとおぼしめされ、いのくちえちぜん守どののしばらく寄せ手をさゝえさせて、そのまに御しやうがいなされました。御かいしゃくは福寿庵のでござります。鶴松太夫と申す舞のじょうずもおりましたが、いつもお供をおおせつかつておりましたおなさにこんども御しやうばんをさせていたゞきますと申して、おさかずきをいたゞいて、ごさいごをみとゞけてから、ふくじゅ庵どの、介錯をつとめ、じぶんはお座敷よりいちだん下の板じきへさがつて腹をきりましたそうにござります。そのほか井口どの、赤尾与四郎どの、千田うねめのしよどの、脇坂久さえもんどの、みなさま自害なされました。この御いんきよはおとしをめしていらしたのにお氣のどくなてんまつでござりましたけれども、かんがえてみればすべて御自分がわるいのでござります。こう云うはめにならないうちに、はやく長政公のおことばにしたがわれて朝倉どのをおみかぎりなされたらようござりましたのに、おだどの、御うんせいをみぬく御がんりきもなく、よしないきりをおたてになつてあえなくおはてになりましたのは、たれをうらむことがござりましょう。そればかりか、かつせん駈けひ

き、出陣のしおどきについても、御いんきよろしく引つこんでいらつしやればよいものを、いち／＼出しゃばつて長政公のこけいりやくをじゃまなされ、勝つべきいくさにおくれをとつて、みす／＼御運をにがしたこともいくたびだつたでござりましょう。おだのがてんまはじゆんのいきおいを持っておられたからとて、ながまさ公のさいはいにおまかせになつていらしたら、これほどのことはござりませなんだ。されば浅井のお家は、一代のすけまさ公、三代のながまさ公、ともにぶそうのめいしうでいらつしやいましたのに、二代の久政公の御りようけんがつたなく、御思慮があさかつたばかりにめつぼうをまねきました。それをおもえば長政公こそおいたわしゅうござります。あわよくば信長公にとつてかわりてんがのしおきをなさる御器量もちながら、おやごのいいつけをおまもりなされて、御じぶんで御じぶんのうんせいをおち／＼めなされました。わたくしどもが考えましてさえ齒がゆうて齒がゆうて、あきらめきれないのでござりますものを、おくがたのおむねのなかはどれほどでござりましたことか。なれどもそれも御孝心のおふかいせいでござりましたので、まことにぜひがござりませぬ。

御隠居のまるのおちましたのは二十九にちの午のこくごろでござりまして、それから、柴田、木下、前田、佐々の手のものどもが一つになつて御ほんまるへおしよせました。ながまさ公はお手まわりの小姓五ひやくばかりできてゝられさん／＼にてきをなやましてさつとお引きになりましたので、よせてはくろけむりをたて、無二むさんにせめましたけれども、堀へとつこうとするものを突きおとしはねおとし、てきを一人も丸のなかへ入れませなんだ。それで二十九にちのよるは寄せ手もせめあぐんできゆうそくいたしましたし、あくる九月ついたちにまたせめてまいりました。ながまさ公は

そのときまで父の御さいごを御存じなく、「下野守どのはどうなされた」と小姓におたずねなされましたところに、「ごいんきよはさくじつ御しようがいのでござります」と申しあげるものがおりましたので、「そうとはゆめにも知らなんだ、それをきくからは此の世になんのみれんがあるう、ち／＼うえの弔いがつせんをしていさざよくおあとを追うばかりだ」と、巳の刻ごろに二ひやくばかりで切つて出られ、むらがるてきをきりふせく――とあしもひかずた、かわれましたが、柴田木下のぐんぜいがとうま／＼と取りかこみ、味方はわずか五六十人になりましたので、一文字にかけちらし、御ほんまるへ馳せいろうとなされますうちに、敵は御ほんまるをのつとつて中から門をかためてしまいましたので、御門の左わきにある赤尾美作守どの、屋形へおのがれになりまして、やがてお腹を召されました。御かいしやくは浅井日向守。お供をいたしたひと／＼は、日向のかみをはじめとして、なかじましん兵衛、なかじま九郎次郎、きむらたろじろう、木むら与次、浅井おきく、わきざかさすけ、などのかた／＼でござります。てきは信長公のおおせをうけて、なんとかしてながまさ公を生けどりにしようとしたのだそうでござりますけれども、きこゆる剛将がひつしのはたらきのゆえにそんなすきはござりませなんだので、あとから屋形へふみこんでおん首ばかりを戴いたのでござります。

いけどりと云えば、あさい石見守、赤尾みまさかのかみ、おなじく新兵衛、この三人のかた／＼は武運つたなく縄目のはじをおうけになつて御前へひきすえられました。そのときのぶなが公が、「そのほう共、しゅじん長政にぎやくしんをおこさせ、としごろひごろようも己をくるしめたな」とおつしやりましたので、石見どのは強情な仁でござりますから、「わたくし主人あさいながまさは織田ど

の、よゝうな表裏ある大将ではござりませぬ」と申しあげますと、のぶなが公かつと御りつぷくあそばされ、「おのれ、ふかくにも生けどりになるほどの侍として、ものゝひよりが分るか」と、鑓やりのいしづきで石見どの、あたまを三度おつきになりました。なれどもひるむけしきもなく、「手足をしばられているものをちようちやくなされてお腹がいえますか、おん大将のこゝろがけはちがつたものでござりますな」とにくまれぐちをたゝかれましたので、ついにお手うちになりました。美作どのはおとなしくしておられましたところが、「その方じゃくねんのみぎりより武勇のほまれたかく、おにがみのようにうたわれながらなんとしておくれを取ったるぞ」との仰せに、「とかく老もういたしまして此の通りのしまつでござります」と申され、「いちめいを許して取りたてゝつかわそう」という御説ごしやうでござりましたけれども、「このうえはなんの望みもござりませぬ」と申されてひたすらおいとまをねがわれました。「しからばせがれの新兵衛を世話してやろう」とかさねて御じようがござりましたときに、美作どの御子息しんべえどのをかえりみられ、「いやゝゝ、御辞退申した方がよいぞ、殿にだまされてわるびれてはならぬぞ」と申されましたので、からゝとおわらいなされ、「老いばれめ、己をうたがっているな、そんなに己がうそつきに見えるか」と仰っしゃって、そのゝちほんとうに新兵衛どのお取りたてになりました。

小谷のおくがたは夫おつとながまさ公御しやうがいとおきゝあそばしてから、一とまにとじこもられたきりにちゝ御回向をあそばしていらつしやいますと、或る日のぶなが公が見まいにおいでなされ、「たしかそなたには男の子が一人あつたはずだ、その子がたつしやならわたしが引きとつてよう義い言くをして長政のあとをつがせてや

りたいが」と仰つしやるのでござりました。おくがたは最初、兄ぎみのこゝろをはかりかねて、「若わかはどうなりましたことやら存じませぬ」と申されましたが、「ながまさこそかたきだけでも子どもになんの罪があろう、わたしには甥おいになるのだからいとおしゅうてたずねるのだ」と仰つしやりますので、さてはそれほどにおもつて下さるのかとだんぐ御あんどあそばされ、これゝのところにありますと、万福丸どのゝかくれがをおもらしになりました。それでえちぜんの国つるがごおりへお使者が立ちまして、木村喜内きないのすけ介へ、わかぎみをつれてまいるように仰せつかわされましたけれども、きないのすけは思案をいたし、わかぎみは自分いちぞんを以て斬つてすてましたとおこたえ申しましたところが、その後もさいゝおつかいがござりまして、兄うえがあゝまで云われるものをなまじかくしては折角のなさにそむく、わがみも和子わこのぶじな顔をみたいほどに一日もはやくつれてきておくれと、しきりにおくがたがせつかれるものでござりますから、きないのすけもこゝろえがたくおもいながら、とてもありかを知られたうえはと、万福丸どのゝお供をして、九がつ三日にごうしゅう木之本へまいりました。すると木下藤さちろうどのがむかえに出られて若君をうけとられ、のぶなが公へそのむねを言上いたされますと、「その方その子を討ちはたし、くびを串さしにしてさらしものにしろ」と仰つしやりますので、さすが藤吉郎どのもとうわくいたされ、「それまでのことは」と云われましたなれども、かえつてお叱りを蒙りまして、よんどころなく御説のとおりになされました。ながまさ公のお首も、あさくら義景どのゝお首といつしよに、肉をさらし取つて朱塗りにあそばされ、よくねんの正月、それを折敷おしきにすえてさんがの大名しゅうへおさかなに出されました。のぶなが公も浅井どのゝためにはたびゝあ

やうい目におあいなされ、よほどおにくしみが深かったのでござりましようけれども、もとはと云えば御じぶんの方がせいしを反古になされたのでござります。せめて妹御のおんなげきをさっしておあげなされたら、えんじやのよしみもあるおかたをあれほどになさらないでもようござりましたろうに。とりわけにくしんのなさけをかりてお市どのをあざむかれ、がんぜないお子をくしざしになさるとは、あまりむごたらしいなされかたでござります。されば天正じゅうねんの夏、ほんのう寺においてひごうにおはてなされましたのも、あけちがぎやくしんばかりではなく、おおくのひとのつもるうらみでござりましよう。いんがのほどはおそろしゅうござります。

のちの太閤殿下、きのした藤吉郎どのがりっしんなされましたのも此のころからでござりました。こんどの城ぜめには柴田どのはじめみなく手柄をきそわれましたなれども、なかについて藤吉郎どのはばつぐんの功をおたてなされ、のぶなが公もなゝめならずおよろこびになりまして、小谷のおしろと、あさい郡ていりと、坂田さかたごおりのはんぶんと、いぬがみ郡とを所領にくだされ、江北のしゅごとなされました。そのおり藤吉郎どのは、小谷のおしろは小ぜいにてはまもりがたいと仰せられ、わたくしのこきよう長浜へうつられまして、当時あそこは今浜と申しておりましたのを、このとき長浜とおあらためになったのでござります。

それはとにかく、ひでよし公が小谷のおくがたに懸け想そうなされましたのはいつごろからでござりましたか。わたくしはおくがたがお城をおたちのきなされましたとき、「いっしよにつれて行つてやりたいが、いったんこゝをおちのびてからたよつておいで」と、有りがたい仰せがござりましたものですから、この身はすでになきものとかくごいたしておりましたのがまよいのこゝろをしようじまして、

おのりものゝあとからまぎれ出で、かつせんのしづゆうを見とゞける迄いちにちふつかは町かたにかくれておりましたけれども、またおそばをしようと上野守どのゝ御陣へあがりましたところ、氣にいの座頭であるからおこえが、りがござりましたので、さいわいにきびしいおとがめもござりませんで、ふたゝび御用をつとめておったのでござります。されば秀吉公がおこなされましたおりにもたびくお次にひかえておったのでござりますが、はじめて御たいめんのときは、御前へ出られますとはるかにへいふくされまして、「わたくしが藤吉郎にござります」とうやくしい御あいさつでござりましたので、おくがたもつゝまじやかに御えしやくを返され、せんじんの骨折をおねぎらいなされました。ひでよし公は、「わたくし、このたびさせる軍功もござりませぬのに御褒美としてあさいどのゝ所領をたまわり、もつたいたなくも長政公のおんあとをつぎますことは弓矢とつてのめんぼくでござります、たゞこのうえは何事も古きおしおきにしがって江北をとりしずめ、亡きおん大将の武ゆうにあやかりとうぞんじます」と申され、「陣中のことゆえさぞ御不じゆうでござりましよう、なんぞお手まわりのしなにても御不足のものはござりませぬか、おこゝろおきのうお申しつけくださりませ」などゝ、それはく如在じょさいのないおことばで、おどろくばかりあいそのよいお方でござりました。ことにひめぎみたちにまで何くれと御あいきようを振りまかれ、御きげんをとられまして、「お姫さまがいちばんの姉あねさまでいらっしやいますか、どれくゝ、わたくしに抱だつこなさりませ」と、お茶々どのをひざの上へおのせなされおぐしをかいておあげなされて、「おとしはいくつ、おなまえは」などゝおたずねになるのでござりました。お茶々どのははかくしい御へんじもなさらずにしぶく抱かれていらっしやいました、が、

このひとが父御のしろをせめおとした一方の旗がしらかと、おさなごゝろにもにくゝおぼしめしましたものか、ふと秀吉公のおをおさしなされ、「そなたは猿に似ているのかえ」とおっしゃりましたものですから、ひでよし公もすこし持てあまされまして、「さようでござります、わたくしは猿に似ておりますが、お姫さまはお袋さまにそっくりでいらっしやいますな」と申され、はっ、はっ、はっ、と、わらいにまぎらされました。その後もおいそがしいなかをぬけめなくおみまいにおいでなされ、何やかやとひめぎみたちにまで御しんもつをなされまして、ひとかたならぬおこゝろぞえでござりましたから、おくがたも、「藤きちろうはたのもしいものじゃ」と仰っしゃって、気をゆるしていらっしやいましたけれども、わたくし、いまからかんがえますのに、お市どのゝ世にたぐい御きりようにはやくも眼をおつけなされ、ひとしれず思いをよせていらしたのではござりますまいか。もっとも主人のぶなが公のいもうと御であらせられ、けらいの身ではおよびもつかぬ高嶺の花でござりましたからまさかそのときにどうとおつもりもござりますまいが、なにぶん此のみにちにかけましたらゆだんのならぬ秀吉公でござります。みぶんのちがいと申ししても、ういてんぺんは世のつねのこと、とり分けえいこせいすいのはげしいのは戦国のならわしでござります。さればながい月日のうちにいつかは此のおくがたと、ひそかにのぞみをおかけなされましたやら、なされませなんだやら、えいゆうごうけつのこゝろのうちは凡夫にはかりかねますけれども、あながちこれはわたくしの邪推ばかりでもないような気がいたします。

そう云えば万福丸どのを討ちはたすように仰せがござりましたとき、ひでよし公のとうわくなされかたは尋常でなかったと申します。

あればかりのわかぎみ一人おゆるされになりましたとて何ほどの事がござりましようや、それより浅井どのゝみようせきをおつがせなされ、おんをおきせになりました方がかえって天下せいひつのもとい、仁あり義あるなされかたとぞんじますと、さまぐにおとりなしあそばされましたが、おきゝ入れがござりませなんだので、「しからはなにとぞ此のやくを余人におおせつけくださりますよう」と、いつになくさからわれましたところ、のぶなが公はなはだしく御きげんを損ぜられ、「その方こんどの功にほこつてまんしんいたしたか、いらざるかんげんだてをなし、あまつさえわがいつけをしりぞけて余人にたのめとは何ごとだ」と、きびしくおとがめなされましたものですから、しおくゝと退出されまして、けつきよく若君を御せいばいなされたのだときいております。かれこれおもいあわせますのに、ひでよし公はまんぶくまるどのを害されて、のちくまでもおくがたのうらみをお受けなさることがおつらかったのでござりましよう。それもなみくのころしかたでなく、くしぎしにしてさらしものにせよとの御じょうとありましたは、なおさらのことではござります。この役まわりがえりにえて秀吉公にわりあてられましたのは、笑止と申しましようか、おきのどくと申しましようか。こうねん柴田どのとこのおくがたの取りあいなされ、こいにはおやぶれになりましたけれども、ついに勝家公御夫婦をせめほろぼされ、生々よのかたきとなられましたものときからのいんねんがなござりましよう。

当時わかぎみの御さいこのことはおくがたのお耳へいれぬようにと、のぶなが公のおこゝろづかいがござりましたので、たれいちにんも申しあげたものはないはずでござりますけれども、さらしくびにまでなりまして、しよにんのまなこにふれましたことゆえ、うす

く世上せじょうのとりにさたをおきゝこみになりましたか、またはむしがしらせたと申しますものか、いつからともなくけはいをおさとりあそばしてきつと御しあんなされたらしゅう、それから秀吉公がおこしになりますとかえつてみけしきがすぐれぬようでござりました。なれども或る日、「えちぜんからはあれきりなんのたよりもないが、若わかはどうしたことかしらん、とかく夢みがわるいので気になります」と、ひでよし公へおたずねになりましたので、「さあ、いっこうに承知いたしませぬが、いまいちどおつかいをお出しなされましては」と、さあらぬていで申されますと、「でも、そなたが若をうけとりに行ったというではないか」と仰おほっしゃりましたのが、しづかなうちにもするどいおこえでござりました。こしもと衆のはなしでは、そのときばかりはお顔のいろまでがまつさおにかわつて、ひでよし公をはつたとおねめつけなされたそうにござります。そんなことから秀よし公は御前のしゅびがわるくなりまして、だんく遠のかれましたのでござります。

さて信長公はわずかのあいだに数箇国をきりなびけられ、ことぐくわがりようぶんにくわえられまして、しょうしへの御ほうび、こうにんのおしおきなど、それぐ御さたあそばされ、九がつ九日にはもはや岐阜のおしろにおいて菊の節句をおいわいあそばされしました。重陽ちやうようのえんはまいねんのことでござりますけれども、べつしてそのみぎりは大小名がよそおいをこらしてお礼にまいられ、ごんごどうだんのぎしきのありさま、めをおどろかすばかりであつたともつばらのうわさでござりました。おくがたはしょうと申しふれられてしばらく江北におとまりなされまして、どなたにもたいめんあそばされず引きこもっておられましたが、おなじ月のとおかごろ、いよく尾州清洲びしゅうきよすのおさとかたへおかえりあそばすことにな

りました。当時信長公はぎふの稲葉やまを本城になすっていらつしやいましたので、おくがたには閑静なきよすのおしろのほうが御つごうがよかったのでござります。もつとも途中ちくぶしまへさんけいなさりたいと云う仰せでござりましたから、お女中がたやわたくしども、おつきそい申しあげまして、長浜よりお船にめされました。おりふし、伊吹いぶきやまにはもう雪がつもっておりまして、みずうみのうえはひとしおさむうござりましたけれども、さえわたった朝のことでござりましたので、とおくちかくの山々まではつきり見えたのでござりましょう、お女中がたはみなくふなばたにとりついて、ながねんすみなれた土地にわかれを惜しまれ、そらをわたるかりがねのこえ、かもめの羽ばたきにもなみだをながされ、かぜにそよぐあしの葉のおと、なみまにおどる魚のかげにもあわれをもよおされましたことでござります。ふねが竹生ちくぶしまの沖あいへまいりましたとき、「しばらくこゝでとめておくれ」というおことばでござりまして、いちどう何事かと不しんにぞんじておりますと、やがて舳へなに経づくえをおなおしなされ、水のおもてにむかつてたなごゝろを合あわされしづかに御ねんじゅあそばされましたのは、おおかたそのあたりのみなぞこにかの石塔がしづめてあつたのでござりましょう。さてはちくぶしまへまいりたいと御意ごいなされたのもそういう仔細しそがとおりになったのかと、そのときわれぐもおもいあたりましたのでござります。ふねが波のまにくゆられて一つところたゞようておりますあいだ、おくがたは香をおたきあそばして南無徳なむとくしょう勝寺殿天英宗清大居士と、いっしんにおんまなこを閉じられ、あまりながいこと合掌なされていらつしやいますので、もしやこのまゝ、ふなばたよりおん身をひるがえし、おなじみなぞこのもくずにおなりあそばすのではないかと、おそばのかたぐはしんぱいし

まして、そつとおめしものゝすそをとらえていたそうでござります
が、わたくしにはたゞ、おくがたのお手のうちで鳴るじゅうずのおと
がきこえ、たえなる香のかおりがにおつてまいったばかりでござり
ます。

それよりしまへおあがりなされて一と夜参籠あそばされ、あくる
日佐和やまへおわたりになりまして、いちにちふつか御きゆうそ
くなされましてから御ほつそくあそばし、どうちゆうつゝがなく
清洲のおしろへ御あんちやくになりました。おさとかたではけつ
こうな御殿をしつらえてお迎え申し、「小谷のおん方」とおよび申
しあげて至極たいせつなおとりあつかいでござりましたから、なに
御不自由のないおみのうででござりましたけれども、姫ぎみたちの
御せいじんをたのしみにあさゆう看経をあそばすほかにはこれと
申すお仕事もなく、おとなうお方もござりませんので、もうまった
くの世すてびとのような佗びしいおくらしでござりました。それに
つけても、いまゝではおおぜいの人目もござりますし、なにやかや
とおまぎれになることもござりましたのに、ひねもすうすぐらいお
部屋のおくにとじこもつていらしてしよざいなくおくらしなされ
ましては、みじかい冬の日あしでさえもなか／＼長うござります。
しぜんおむねのなかには亡き殿さまのおすがたがおもいうかべら
れ、あゝいうこともあった、こういうこともあったと、かえらぬむ
かしをおしのびなされて悲歎にくれていらつしやいました。いった
いおくがたは武門のおうまれでいらつしやいますから、なにごとに
も御辛抱つようござりまして、めつたと人にふかくのなみだをおみ
せになることはござりませなんだが、もはやその頃はおそぼの衆と
申しましてわたくしどもばかりでござりましたので、はりつめた
おこゝろもいつときにおゆるみなされたのでござりましょう。いま

こそほんとうのかなしみにおん身をゆだねられ、ひとけのない奥の
間で何をおもい出されましてかしのびねに泣いていらつしやるの
が、ふとお廊下を通りますときに耳についたりいたしまして、とか
くお袖のしめりがちな日がおおいうでござりました。

そういう風にして一と、せ二たとせはゆめのようにすぎましたなれ
ども、そのあいだ、春は花見、あきはもみじがりのお催しなど、お
氣ばらしにおすゝめいたしましても、「わたしはやめます、おまえ
たちで行つておいで」と仰つしやいまして、御じぶんは浮世のほか
のくらしをなされ、たゞひめぎみたちをお相手になされますのがせ
めてものお心やりと見えまして、御きげんのよいおわらいごえのき
かれますのはそんなときばかりでござりました。さいわい三人のお
子たちはどなたもおたつしやにおそだちなされ、おんみのたけも日
ましにおのびになりまして、いちばんおちいさい小督どのなども
最早やおひとりであんよをなされたり、かたことまぜりにものを仰
つしやつたりなされましたので、それをごらんあそばすにつけても
亡き夫が御ぞんしょうであられたならばと、またおんなげきのた
ねでござりました。べつしておふくろさまとしましては、まんぶく
丸どのゝ御さいごのことをお忘れなく、いつまでもおいたみなされ
ていらつしやいましたが、なにぶん御自分のあさはかさから現在の
お子を敵におわたしなされまして、あゝいうおかあいそうなことにな
ったのでござりますから、だました人もうらめしく、だまされた
わが身もくちおしく、なか／＼おあきらめになれなかつたらしゅう
ござります。それに福田寺へおあずけなされた末の若君もいまはど
うしていらつしやるやら。よいあんばいに信長公は此のお子のこと
を御存知なされませんでしたので、いったんはおのがれになりました
ものの、乳のみ児のおりにおわかれなされましたきりその後の

安否をおきゝにならないのでござりますから、口に出しては仰つしやりませんでも、雨につけ風につけ、いちにちとしておあんじあそばさないときはなかつたでござりましょう。そんなことから一そうひめぎみたちを世にないものにおぼしめしまして、ふたりの若君の分までもかあいがつてお上げなされました。

京極さいし^{幸相}う殿高次公は、ちようどそのじぶん十三四さいでいらつしやいましたでしょうか。のちには信長公の小姓をつとめられましたけれども、お元服まえはきよすにあずけられていらつしやいまして、ときぐくおくがたの御殿へおこしなされたことがござりました。申すまでもござりませぬが、もと此のお児は浅井どののお家にとつては御主筋^{おしやうすじ}にあたられる江北のおん屋形、佐々木高秀公のおわすれがたみでござります。さればがんらいはこのお児こそ近江はんぐくのおんあるじでござりますけれども、御先祖高清入道のとくき伊ぶきやまのふもとに御いんたいなされましてから、御りようないは浅井どのの御威勢になびいてしまひまして、御じぶんたちはほそぐくとくらししていられつしやいましたところ、せんねん小谷らくじようのみぎり、のぶなが公が江北に恩をきせようとの御けいりやくからわざぐく此のお児をおよび出しになりました、小姓におとりたてなされたのでござります。こうねん、天正十年のろくがつ惟任^{これとう}ひゆうがのかみのはんぎやくにくみして安土^{あづち}万五郎のともがらと長浜のしろをおせめなされ、まつた慶ちよう五年の九月関ヶ原かっせんのおりには、大坂がたに裏ぎりをなされて大津にろうじようあそばされ、わずか三千人をもつて一まん五千の寄せ手をひきうけられましたのは此のお方でござりますが、まだそのころは、そういう横紙やぶりの御きしようともみえませなんだ。おとしから云えばわんぱくざかりの時分でござりましたけれども、貴人のおうまれであ

りながら幼いときよりひか^{日陰}げものゝようにおそだちなされ、どこかにこゝろぼそそうなあわれな御様子がおありになって、御前へ出られてもおくちかずがすくなく神妙にしていらつしやいましたので、わたくしなどには、いらつしやるのかいらつしやらないのか分らないくらいでござりました。もつとも此のお児のおふくろさまは長政公のいもうと御^ごでござりましたから、ひめぎみたちとはいとこ同士、おくがたは義理の伯母御におなりなされます。それで万ぶく丸どのゝことをしのばれるにつけても此のお児をいとしがられまして、「わたくしが母御のかわりになって上げますよ、用のないときはいつでもこゝへあそびにおいで」と仰つしやって、なさをかけてお上げなされ、「あの児はだまつているけれども腹にしっかりしたところがある、きつと利発ものにちがいない」とおほめになつていらつしやいました。さようでござります、おはつ御料人^{ごりようにん}と御えんぐみをなされましたのは、それよりずつとのち、七八ねんもさきのことでござりまして、当時は姫ぎみもおちいそうござりましたから、そんなおはなしはござりませなんだ。なれども此のお児は、おはつどのよりもお茶々どのに人知れずのぞみをかけておいでなされ、それとなくお顔をぬすみ見にいらしたのではござりますまいか。もちろんどなたもそう気がついたかたはござりませなんだが、子供のくせに大人のようにおちついていらして、むつつりとおだまりなされ、いつまでも御前にかしこまつておいでなされたのは、何かいわくがおりになったのかとおもわれます。そうでなければ、かくべつおもしろいこともないのにしばぐ御殿へおこしなされて、窮屈なおもいをあそばしながらじつとすわつていらつしやる訳もござりますまい。わたくしだけはなんとなく無気味なようにかんじまして、うすぐ嗅^かぎつけておりましたので、「あの児はお茶々さ

まに眼をつけているらしい」と、こしもとしゆうに耳うちをしたことがござりましたけれども、めくらのひがみだと申されましてみなさまがおわらいなされ、まじめにきいて下すったかたはござりませんだ。

さあ、おくがたが清洲にいらつしやいましたあいだは、小谷のおしろのおちましたのが天しようがんねんの秋のこと、それよりのぶなが公御逝去のとしの秋ごろまでござりますから、あしかけ十年、ざつとまる九ねんの月日になります。まことに光陰は矢のごとしとやら、すぎ去つてみればなるほどそうでござりますけれども、天下のみだれをよそにおながめあそばされ、いづどこに合戦があつたとも御存知ないようなひっそりとしたくらしをなされましては、九年というものはずいぶんなごうござります。さればおくがたもいつとはなしに次第にかなしみをおわすれなされ、つれづれのおりにはまた琴などのおなぐさみをあそばすようになりました。それにつれましてわたくしも、すきなみちではござりますし、お気散じにもなりますことゆえ、御ほうこうのあいまには唱歌やしゃみさんのけいこをはげみ、わざをみがきまして、いよく御意にかないますように出精いたしましたこととでござります。唱歌と申せば、あの隆達節という小唄のはやり出しはたしかそのころでござりまして、

さてもそなたは

しもかあられか初ゆきか

しめてぬる夜の

きえぐとなる

など、申すのや、それからまた、

りんきごころに

枕な投げそ

なげそまくらに

とがはよもあらじ

と申すうた、もつとおかしな文句のものでは、

帯をやりたれば

しならしの帯とて

非難をしやる

帯がしならしなら

そなたの肌もしならし

など、よくみなさまにうたつてきかせたことがござります。ちかごろは此のりゆうたつぶしもすたれましたけれども、一時はあれが今の弄斎節のように大はやりをいたしまして、きせん上下のへだてなくうたわれたものでござります。太閤でんか、伏見のおしろでお能を御らんなされたときは、隆達どのをおめしになつて舞台でうたわせられまして、幽斎公がそれにあわせて小つづみをお打ちになりました。わたくしがきやすにおります時分は、ようく流行しはじめたころでござりましたから、最初はほんの腰元しゅうの憂さはらしに、扇で拍子をとりながら小ごえでそつとうたいまして、節をおしえて上げたりしたのでござりますが、お女中がたは今申し上げたおかしな文句のうたがおすきで、あれをうたわせてはころくとおわらいになるものですから、いつしかおくがたのお耳にとまりまして、「わたしにもうたつてきかせておくれ」と仰っしゃるのでござりました。「なかく、あなたがたにおきかせ申しますようなものでは」と、御じたい申し上げましても、「ぜびにうたえ」と御意なされますので、それからたびく御前へ出ましてうたったことがござります。「おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれ」

と申す、あの文句をたいそうおこのみなされ、あれをいつでも御所望あそばされまして、いったいにうき／＼としたものよりは、しみりとした、あわれみのふかいものゝ方がおすきのようでござりました。よくわたくしがおきかせ申しましたのは、

しぐれも雪も

をり／＼にふる

君故なみだは

いつもこぼるゝ

とか、

おもふとも

そのいろ人に

しらすなよ

おもはぬふりで

わするなよ

といううな唄でござります。この二つのうたの文句は何かしらわたくしの胸のおもいにかよいますまいか、これをいっしんにうたいますときは、腹のそこより不思議なちからがあふれいで、おのずから節まわしもこまやかになりこえさえ一そうのつやを発しましたので、おき／＼になるかたもつねにかんどうあそばされ、又自分でも自分のうたのたくみさにき／＼ほれまして、こゝろの中のわだかまりがいつときに晴れるのでござりました。それにわたくしはしゃみせんの曲をかんがえまして、文句のあいだにおもしろい合いの手などをくわえて、いちだんと情じょうのふかいものにいたしました。こんなことを申しますと何やら自慢めきますけれども、こういう小唄に三味せんを合わせますのは、わたくしなどのいたずらが始めなのでござりまして、まえにも申しましたように、当時は鼓で拍子をとります

のが普通だったのでござります。

とかくはなしが遊芸のことにわたりますようでござりますが、わたくしいつもかんがえますのに、うまれつきおんせいがつくしく、唄をきようにうたうことが出来ますものは此のうえもなく仕合わせかとぞんじます。隆達たかどのも元は堺さかいのくすりあきうどでござりましたのに、うたが上手なればこそ太こう殿下のお召しにもあずかり、ゆうさい公につゞみを打たせていちだいの面目をほどこされました。もつともあのかたはみずから一流をはつめいなされましたほどの名人、それにくらべたらわたくしなどはものゝかずでもござりませぬが、清洲のおしろで十年じゅうねんの春秋はるあきをすごしまするあいだ、あけくれおくがたのおそばをはなれず、月ゆき花のおりにふれて風流のお相手をつとめまして、ひとかたならぬ御恩をこうむりましたのも、いさゝかおんぎよくをたしなみましたがゆえでござります。人の望みはいろ／＼でござりまして、何がちばんの果報とも申されませぬから、わたくしのようなきょうがいをおわれとおぼしめすかたもござりましようなれども、じぶんの身にとり此の十ねんのあいだほどたのしいときはござりませなんだ。さればなか／＼隆達たかどのをうらやましいとおもいませぬ。それを何ゆえかと申しますのに、おくがたのおことにあわせて三味線のひじゅつをつくし、または御しよもうの唄をおき／＼に入れて御しんちゅうのうれいをやわらげ、いつも／＼おほめのおことばをいたゞいていたのでござりますから、たいこうでんかのぎょかんにあずかりましたよりもずっとほんもうでござります。これもめしいにうまれましたおかげかとおもえば、このとしになりますまで自分のかたわをくやんだことは一ぺんもござりませぬ。

世のことわざに、蟻のおもいも天までとゞくと申します。はかない

盲法師でもちゅうぎは人とかわりませぬから、すこしでも御しんろうが癒えますように、せいぐ御きげんうるわしゅうおくらしなされますようにと、ころをこめておつかえ申し、しんぶつにきがんをかけましたせいか、いや、あながちに、そのせいばかりでもござりますまいが、そのころおくがたはおいくにお肥えあそばされ、いちじはずいぶんやつれていらつしやいましたのに、又いつのまにかむかしのようにならずくしゅうおなりなされました。おさとへおかえりになりました当座は、お肩のほねといちばんうえのあばらとのあいだに凹みが出来、それがだんくふかくなりまして、おくびのまわりなどひとしきりの半分ほどにおなりなされ、やせほそられるばかりでござりましたので、りょうじを仰せつかりますたびになみだにくれておりましたところ、三年目、四ねんめあたりから、うれしや日に月にわずかず肉がおつきなされ、七八ねん目には小谷のころよりもなまめかしゅうつやくとおなりなされて、これが五人のお子たちをお産みあそばしたおかたとはおもえぬほどでござりました。こしもとしゅうにきましても、丸顔のおかおがひところほそおもてになられましたのに、このころはまた頬のあたりがふつくらしもぶくれにおなりあそばし、それにおくれ毛のひとすじふたすじかかりました風情はたとえようもなくあだめいて、おんなでさえもほれぐしたと申します。お肌のいろがまっしろでいらつしやいましたのはもとより天品でござりますけれども、ながのとしつき日の眼のとぐかぬおくのまに寝雪のようにとじこもっておくらしなされ、すきとおるばかりにおなりあそばして、たそがれどきにくらいところでものおもいにしずんでいらつしやるお顔のいろの白さなど、ぞうつと総毛だつようにおぼえたそうでござります。もっとも物のあやめは、かんのよいめくらにはおおよそ手ざ

わりで分るものでござりまして、わたくしなども、どんなにいろいろでいらつしやいますかはひとのうわさをきくまでもなくしようちいたしておりますが、おなじ白いと申ししても御身分のあるおかたのしろさは又かくべつでござります。ましておくがたは三十路にちかくおなりあそばし、お年をめすにしたがつていよく御きりようがみずぎわ立たれ、ようがなますくおんうるわしく、つゆもしたるばかりのくろかみ、芙蓉のはなのおんよそおい、そのうえふくよかにお肥えなされたおからだのなよくとしてえんなること、申したら、やわらかなきぬのおめしものがするくすべりおちるようでござりまして、きめのこまかなめらかさはお若いときよりまたひとしおでござりました。それにしてもこれほどのおかたが早くから不縁におなりなされ、つむにあまる色香をかくしてあじきないひとりのゆめをかさねていらつしやるとは、なんということか。しんざんの花は野のはなよりもかおりがたかいと申します

は

たまだれ

が、春はお庭にきて啼くうぐいす、あきは山の端にかたぶく月のひかりよりほかにうかうもの、ない玉簾のおくのおすがたを、もし知るひとがありましたら、ひでよし公ならずとも煩惱のほのおをもやしたことでござりましように、とかくよのなかの廻りあわせはこうしたものでござります。

そんなぐあい、そのころのおくがたは、花さく春のふたゝびめぐりくるときを待ちあそばす御様子も見えましたが、やはりむかしのおつらかったこと、くやしかったことを、きれいに忘れにはならなかったらしゅうござります。それと申しますのは、わたくし、あんなことはあとにもさきにもたつた一遍でござりますけれども、ある日御りょうじをつとめながらお話のお相手をしておりまして、き、何かのはずみで、おもいがけないおことはを伺ったことがある

のでござります。その日は最初れいになく御きげんのていでござりまして、小谷のころのこと、長政公のおんこと、そのほかいろく古いことをおもし出されておきかせ下さいましたついでに、ひとせ佐和やまのおしろにおいてのぶなが公とながまさ公と初めて御たいめんなされたおりのおものがたりがござりました。なんでもそれはおくがたが御えんぐみなされましてから間もなくのこと、おおかた永ろく年中でござりましたろう、当時さわやまは浅井どの、御りようぶんでござりましたから、のぶなが公はみのくによりおこしなされ、ながまさ公はすりはり峠までお出むかえあそばされ、やがておしろへ御あんないなされまして、したいめんの御あいさつのち、善をつくし美をつくしたるおもてなしがござりました。さてあくる日は、たゞいま天下の大事をひかえてあなたこなたと日をついやすまいかであるから、今度はそれがしがこのしろをお借り申し、自分が主人役となって御へんれいをいたそうと、のぶなが公より仰せいだされ、ながまさ公と御いんきよとおなじしろにおいておふるまいにおよばれまして、おだどのよりの引出物ひきでものには、一字宗吉のおん太刀をはじめおびたゞしき金子きんすず銀子ぎんすず馬代うまだいを御けらしゅうへままでくだしおかれ、あさいどのよりの御かえしには、おいえ重代じゅうだいの備前かねみつ、定家卿の藤川にてあそばされました近江名所づくしの歌書、そのほかつきげの駒、おうみ綿などけっこうなしなぐをとゝのえられ、お供のかたぐいにも御めいぐへあらみの太刀やわきざしをおくられました。またおくがたも久々にておん兄ぎみに御たいめんのため小谷よりおこしなされましたので、のぶなが公のおんよろこびひとかたならず、あさいどのゝ老臣がたを御前へおめしになりまして、みなくきかれよ、その方どもの主人びぜんのかみが斯くそれがしの聲になるうえは、にほんこくちゅう

は両家の旗になびくであろう、さればそのつもりでずいぶん粉骨ふんこつをぬきんでくれば、きつとおのくを大名にとりたて、つかわすぞと仰せられ、ひねもす御しゅえんがござりまして、夜は御きようだい三人にてむつまじくおくのまへおん入りあそばし、ひきつゝいて十日あまりも御たいりゅうなされました。そのあいだの御ちそうには、さわ山の浦に大あみをおろしまして、鯉やら、ふなやら、湖水のうおを数しれずとてさしあげましたところ、これもことぐく御意にかない、美濃のくにはとても見られぬ名物である故ぜひかえりにはみやげに持つてゆきたいとおおせられ、いよく御帰じようのまえの日にふたゝびおんなごりの御しゅえんなどがござりまして、上々じょうじょうのしゅびにて御ほっそくなされましたとのこと。「あのときは内大臣どのも徳勝寺とくしょうじ殿さまもほんとうに仲がよさそうにこくしていらして、わたしもどんなにうれしかったことか」など、そんなおはなしをこまぐとあそばされまして、「おもえばあの十日ばかりのあいだがわたしのいちばんしあわせなときでした。それにつけても一生のうちにたのしいおりというものはそうたくさんはないものだね」と仰っしゃるのでござりました。さればそのときはおくがたは申すまでもなく、御けらいたちも両家が不和になろうなどは考えてもみませぬことで、みなくせんしゅうばんぜいを祝われたのでござりますが、ながまさ公が兼光のおん太刀を引出物になされましたについて、のちに兎や角申すものがありましたそうにござります。それはなぜかと申しますのに、右のおん太刀は御せんぞ亮政公御ひぞうのお打ち物でござりました由にて、いかにたいせつな御しゅうぎのばあいとはいえ、あゝいう重代のたからを他家へつかわされる法はないのに、そういうことをあそばしたのが、あさいのお家の織田どのにほろぼされる前表ぜんびょうだったのだ

と申すのでござります。なれども理窟はつけようでござります。長政公がそれほどの品をおゆずりなされましたのも、つまりはおくがたや義理の兄上をなみくならずおぼしめたからでござりましよう。そのためにお家がほろびたのなんのと、それは世間のなまものしりがたまく事のなりゆきを見てそういう風に云いたがるのではござりますまいか。わたくしがさように申し上げましたら、

「それはおまえのいう通りです」

と、おくがたもおうなずきあそばして、

「舅となり智となりながら、ほろぼすのほろぼされるのと、そんなことを気にするほうがまちがっています。内大臣どのにしたところで、そのじぶん敵か味方かわからない土地をお通りなされて、わずかのにんずでみのくにはらはるくおこしになるといふのは、容易のことではなかったのです。そのころざしにたいしても、徳勝寺殿さまがあれだけのことをしてあげるのは、ひごろの御きしょうとしてあたりまえだとおもいます」

と仰っしゃって、それからまた仰っしゃいますのに、

「でもおおぜいのけらいのなか中には不ころえなものもいました。たしか遠藤喜右衛門尉という者だったか、あのときわたしたちが小谷へかえると、あとから馬でおいかけて来て、こよい織田どのはかしわばらで御一宿なされます、よいついでゝござりますから討ち果たしておしまいなされませと、わたしには内證で、そつと殿さまにみうちをしたことがありました。おろかなことをいう奴だとのさまはお笑いなされて、おとりあげにはならなかったけれど」

と、そんなおはなしがござりました。

そのみぎり、長政公はすりはり峠までお送りなされ、そこでお別れになりまして、えんどう喜えもののじょう、あさい縫殿助、なかじ

ま九郎次郎の三人をもつて、柏原までのぶなが公のお供をおさせなされたよしにござります。おだどのはかしわばらへおつきになりますと、常菩提院じょうぼだいのおんやどへお入りなされ、こゝはながまさの領分だからすこしも心配はないと仰っしゃって、御馬廻りのさむらいたちを町かたへおあずけになり、お近習きんじゅうの小姓しゅうと当番役のものだけをおそばへお置きなされました。えんどう殿はそのありさまを見てとつて急にひきかえし、馬にむち打ちもろあぶみにて小谷へはせつき、人をおさけてながまさ公へ申されますようは、それがしつくく信長公の御ようだいをうかゞいますのに、ものごとにお氣をつけられることは猿猴えんこうのこずえをつたうがごとく、御はつめいなことは鏡にかげのうつるがごとく、すえおそろしいおん大将でござりますゆえとても此のち殿さまとの折り合いがうまく行くはずはござりませぬ、こよいのぶなが公はいかにも打ちとけておいでなされ、お宿にはほんの十四五人がつめていただけでござりますから、しよせん今のまにお討ちとりなされるのが上分別じょうぶんべつかとぞんじます、いそぎ御決心なされて御にんずをお出しあそばされ、おだどの主従をことくく討ち取って岐阜へらんにゆうなされましたなら、濃州尾州はさつそくお手にはいります、そのいきおいにて江南の佐々木をおいはらい、都に旗をおあげなされて三好をせいばつあそばされるものならば、てんがを御しはいなされますのはまたくうちでござりましよう、しきりに説かれましたうでござります。そのときにながまさ公の仰せに、およそ武將となる身にはころえがある、はかりごとをもつて討つのはよいが、こちらを信じて来たものをだまし討ちにするのは道でない、のぶなが今ころをゆるしてわが領内にとゞまっているのに、そのゆだんにつけ入って攻めほろぼしては、たとい一たんの利を得てもついに天のとがめをこ

うむる、討とうとおもえば此のあいだじゅう佐和山においても討てたけれども、おれはそんな義理にはずれたことはきらいだと仰っしゃって、どうしてもおもちいになりませなんだので、遠藤どのもそれならいたし方がござりませぬが、あとでかならず後悔あそばされるときがござりますぞと申されて、またかしわばらへおもどりなされ、なにげないで御馳走申しあげまして、あくる日無事にせきがはらまでお見おくりなされましたとやら。おくがたは此のいきさつをくわしくおきかせくださりまして、

「しかし遠藤の云ったことにも、いまかんがえれば尤もなふしがあるようにおもわれる」

と、そう仰っしゃるのでござりましたが、そのときふいにおこえがふるえて、異様にきこえましたので、なにかわたくしもはつといたしてうろたえておりますと、

「一方がいくら義理をたてゝも、一方がたてゝくれなかったらなんにもならない。てんがを取るにはちくしょうにもおとつたまねをしなければならぬのかしら」

と、ひとりごとのように仰っしゃって、それきりじつといきをこらえていらっしゃるではござりませんか。わたくし、これはとおもいまして、お肩をもんでおりました手をやすめて、

「はゞかりながら、おさし申しあげております」

と、おぼえずへいふくいたしました。するとおくがたはもう何事もなかったように、

「御苦ろうでした」

と仰っしゃって、

「よいからあちらへ行っておくれ」

というおことはでござりますので、いそいでおつきへさがりました

けれども、そのときはやくはなをすゝっていらっしゃるおとがふすまをへだてゝきこえたのでござります。それにしてもつきさまでは御きげんがようござりましたのに、いつのまにかみけしきがおかりなされ、いまのようなことを仰っしゃったのはどうしたわけか。はじめはたゞ、なつかしいむかしがたりをあそばしていらつしやるうちに、だんくお話に身がいりすぎて、おもい出さずともよいことまでおもい出されたのでござりましょうか。はしたない奉公人なぞに御心中をおもらしなされますようなおかたではござりませなんだのに、しゞゅうおむねのおくふかくこらえてばかりおすしなされましたのが、御自分でもおもいもうけぬときにはからずお口へ出たのかもしれない。なれども小谷のころのことを十とせにちかい今となつてもおわすれなさらず、これほどつよく根にもつておいでなされ、とりわけおん兄のぶなが公へそれまでのおにくしみをかけていらつしやいましたとは。夫をうばわれ子をうばわれた母御のうらみはなるほどこういうものだったかと、わたくしそれをはじめて知りまして、もつたいなさとおそろしさにそのあとしばらくからだのふるえが止まなかったくらいでござります。

まだこのほかにきよすにいらした時分のことはおもいでばなしがかずくござりますけれども、あまりくだくしゅうござりますからこれほどにいたしておきまして、それよりのぶなが公のふりよの御さいごをきつかけに、このおくがたがふたゞ御えんぐみあそばすようになりました始終を申し上げましょう。もっとも信長公御せいきよのことはかくべつ申し上げませいでもあなたがたはよく御ぞんじでいらつしやいます。あの本のう寺の夜討ちのござりましたのが天正じゅう年みずのえうまどしのろくがつ二日。なにしろかようなへんじが^{変事}出来^{しゅつたい}いたそうとはたれいちにんもゆめにもおもい

つかなんだことでござります。そのうえおん子城介どのまでがおなじく二条の御所においてあけちが兵に取りこめられて御せつぷくあそばされ、御父子いちどに御他界と知れましたときはまったく世の中がわきかえるようなさわざでござりました。おりふし御次男きたはたけ中將どのは勢州に御座あそばされ、御三男三七どのは丹羽五ろさえもんとのと御いっしょに泉州堺の津においてなされ、しばた羽柴のかたぐもそれぐとおくへ御出陣でござりまして、あづちのおしろにはお留守居役の蒲生右兵衛大夫どのが手うすのにんずで御台やお女中さまがたをしゅこしておいでなされました。それで侍をはだか馬にのせて御城下へふれあるかせ、「さわぐなく」と取りしずめて廻られまして、まちかたの者はいまにもあけちが攻めて来ると申して泣くやらわめくやらのうろたえ方でござります。右兵衛だいふどのも最初は安土にろうじょうのかくごでおられましたけれども、こゝではこゝろもたないとおもわれましたか、また急に模様がえになりまして、御台やお局さまがたを早々におつれ申し上げて御自分の居城日野谷へたちのかれました。それが三日の卯の刻だそうで、五日には早や日向守があづちへまいりなんなくおしろを乗つとりまして、けっこうなお道具類やきんぎんのたからがそのまゝになつておりましたのをこゝく己れのものになし、家来たちにもわけあたえたと申すうわさでござりました。あづちがそんなふうでござりますから、岐阜でもきよすでも、さあもう今にあけちが寄せて来はせぬかと上を下へのそうどうをいたしておりますと、そのさいちゆうに前田玄以齋どのが岐阜のおしろから城介どの、御台やわかぎみをおつれなされて清洲へにげてこられました。このわかぎみはのぶなが公の御嫡孫にあたらせられる後の中納言どの、当時は三法師どのと申し上げてわずか三つにおなりなされ、お

ふくろさまがたといなば山の居城にいらっしやいましたが、あのもたちをぎふに置いてはあやういから早くきよすへ逃がすようにと、城介どの御自害のとき玄以齋どのへ御ゆいごんがござりましたので、玄以齋どのはたぐちにみやこをのがれ出てぎふへまいられ、御自分でわかぎみを抱きかゝえて逃げてこられたのでござります。そうするうちにあけちのぐんぜいは佐和やま長浜の諸城をおとしられて江州をいちえんに切りなびけ、蒲生どのゝたてこもる日野じょうへとりつめてまいりました。勢州からは北畠中將どのがそれをすくおうとおぼしめされ近江路へ打って出られましたけれども、途中こゝかしこに一揆がおこつてなか／＼すゝむどころではござりませんので、一時はまったくどうなることかとおもつておりますと、やがて三七のぶたか公と五郎さえもんのじょうどのと一手になつて大坂へ馳せのぼられ、ひゅうがのかみの智織田七兵衛どのを討ちとつたと申すしらせがござりました。ひゅうがのかみもそれをきゝますと日野をあけち弥平次にまかせて十日に坂本へ帰陣いたし、十三日にやまざきのかっせん、十四日にはもはやひでよし公三井でらに着陣あそばされ、ひゅうがのかみの首としがいとをつなぎあわせて栗田口においてはりつけになされました。さあそのかちいくさのひょうばんが又たいへんでござりまして、このかっせんには三七どの、五郎さえもんどの、いけ田きいのかみどのゝめん／＼ひでよし公とちからをあわせておはたらきでござりましたけれども、なかなか秀吉公は毛利せいとのあつかいをさつそくに埒あけ、十一日の朝にはあまがさきへとうちやくあそばされまして、そのかけひきのすみやかなることはまことに鬼神をあざむくばかり。ひゅうがのかみは最初すこしもそれをしらずにやまざきへじんを取りましたが、のちにひでよし公ちやくじんときゝましてあわてゝにんずをたてな

おしたと申します。そんなしだいで自然ひでよし公がそうだいしゅうにおなりなされかようにじんそくにしようぶが決しましたので、にわかには御いせいがりゅうくとして御一門のうちに肩をならべるものもないようになられました。

きよすのおしろへもおい／＼^{かみがた}上方から知らせがまいりまして、まあともかくもひとあんしんとみな／＼よろこんでおられました、そのうちにおんこの大名小名がたがだん／＼に駈けつけて来られました。もうその時分、あづちのおしろはあけちの余類が火をつけて焼いてしまいましたし、ぎふにはどなたもいらつしやいませんし、なんと申しても清洲がもとの御本城でござりまして三法師ぎみもいらつしやることでござりますから、まず一往はどなたもこゝへ御あいさつにおこしなされます。わけてもしゆりのすけ勝家公は越中おもて／＼ほんのう寺の変事をおき／＼なされ、かげかつ公と和睦なされていそぎ^{とむぎ}弔いがつせんのためみやこへ上られますところに、はやくも日向守うちじにのよしを柳^{やな}ヶ瀬において御承知あそばされまして、それよりたづちにこちらへおいでなされました。そのほか北はたけのぶかつ公、三七のぶたか公、丹羽五ろぎえもんのじょうどの、いけだ紀伊守どの御父子、はちや出羽守どの、筒井じゅんけいどのなど、十六七日ごろまでにみなさま御あつまりでござりまして、ひでよし公も京都において亡君のお骨をひろわれましてから、いったん長浜の御本領へおたちよりあそばして、ほどなくおこしなされました。のぶなが公御在世のみぎりは、きよすより岐阜、ぎふよりあづちと御本城をおすゝめあそばされ、めったにこちらへおかえりなされまこともござりませず、ながいあいだひっそりいたしておりましたので、かくおれき／＼の御けらいしゅうがおそろいあそばすのはほんとうにひさしぶりでござりました。それに柴田どのをはじ

め先君^{せんくん}と御苦ろうをともになされました旧臣のかた／＼がいまではいずれも一国一じょうのおんあるじ、おおきは数ヶ国^{たいたいみやう}の大々名におなりなされ、きらをかざり美々しき行列をしたがえて引きもきらずに御^着ちやくと^到うなされますので、御城下はきゆうにこんざついたしました、しめやかなうちにもたのもししい気がいたしたことでござります。

さて御城内におきましては、十八日からひろまにおより合いなされまして御ひょうじょうがござりましたが、くわしいことは存じませぬけれ共、亡君のおん跡目相続のこと、明地^{あきち}闕^{けつ}国の始末^{しはつまつ}についての御^談だんごう^合らしゅう^合ござりました。それが何分にも御めい／＼に御りようけんがちがいますことゝて、なか／＼まとまりがつきませんで、引きつゞき毎日のように夜おそくまでおあつまりなされ、ときにはけんかこうろんにも及ばれましたときいております。まあじゅんとうに申しますれば三法師ぎみが御嫡流でいらつしやいますけれども、御幼少のことでござりますから、いまのばあいは北畠どのをおあとへすえようと仰つしやる方々もござりますし、そんなことで何や彼やとむずかしくなったのでござりましょう。しかしけつきよく御家督の儀は三ぼうしぎみにきまりましたものゝ、柴田どのとひでよし公とがはじめから折りあいがあしく、こと／＼にあらそわれたようでござりました。それと申しますが、秀吉公はこんどの功勞第一のお方でござりまして、ない／＼こゝろをお寄せなさるかた／＼がおられますところに、かついえ公はお家の長老でいらつしやいますから、御連枝^{ごれんし}さまをのぞいてはいちばんの上席におつきあそばし、万事につけて列座の衆へ威をふるおうとなされます。ことに御知行^{おちぎやう}わりにつきかついえ公^{専断}せんだんをもつて秀よし公へ丹波のくにおあたえなされ、御じぶんはひでよし公の御本領たる

江州長浜六まんごくの地をおとりなされたのが、双方の意趣をふかめるもになつたと申します。なれどもこれはまあおもてむきでござりまして、まったくのところは、御兩人ながら小谷のおん方にけそうしておいでなされ、どちらもおくがたをわが手に入れようとあそばしたのが事のおこりかとぞんじます。

これより先にかついえ公は、きよすにおつきなされますとおくがたへお目どおりあそばされましてねんごろな御あいさつでござりましたが、その、ち三七どのへみつゝにおたのみなされましたとみえ、或る日三七どのおくがたの御殿へおこしなされましてかついえ公へ御さいえんの儀をおすゝめなされたらしゅうござります。おくがたも、そこはなんと申ししてもおん兄ぎみにたよつていらつしやいましたことゆえ、御ぞんしょうのうちこそおにくしみもござりましたけれども、やはり今となりましてはひとかたならずおなげきあそばし、むかしのうらみもおわすれなされてひたすら御えこうをつとめていらつしやいました折柄、このさき御自分の身はともかくも、三人のひめぎみたちのゆくすえをおもわれますと、だれをちからになされてよいか途方にくれていらつたのでござりましょう。さればかついえ公の浅からぬころをおきゝになりまして、にくからずおぼしめしましたか、まあそれほどでないまでも、あながちおいやではなかつたらしゅうござりますが、一つには徳勝寺でんさまへみさおをおたてなざりたく、一つには小谷どの、後室こうしつとしておだ家の臣下へおくだりなされますことゆえ、そのへんのおかんがえもござりまして、さしあたりとこの御ふんべつもつかずにいらつしやいましたところ、ほどなくひでよし公よりもおなじおもいを申しこされたようにござります。もつともそれはどなたが仲だちをなされましたか、おおかた北畠中將どのあたりでござりましたろうか。な

にゝいたせ北畠どののは三七どのと腹ちがいの御きょうだいでいらつしやいまして、どちらも御れん連枝しであらせられながらおもしろからぬおん間柄でござりましたから、一方がかついえ公の肩をもたれましたにつけ、一方がひでよし公のしりおしをなされたのもござりましょう。もとよりふかく立ち入ったことはしかと申しあげかねますけれども、お女中がたがよりゝにひそくばなしをなされますのを、わたくし小耳にはさみまして、さてはひでよし公、小谷のときよりれんぼなされていらつたのだ、あの時そうとにらんだことはやつぱり邪推ではなかつたわいと、ひそかにおもいあたりましたこととござります。それにしても十年以来、たえずせんぐんばんばのあいだを往来あそばし、あしたに一壘をぬきゆうべに一城をほふるふられるおはたらきをなされながら、そのおいそがしいさなかにあつてなおおくがたのおんおもかげを慕いつゞけていらつたのでござりましょうか。昔をいえば身分の高下もござりましたものの、このたびやまざぎの一戦に亡君のうらみを晴らされ、あわよくば天下をこゝろがけていらつたお方のこととござりますから、いまこそ御執心ごしゅうしんをいろにお出しになりましたものとおもわれます。しかし、ひでよし公はそうとしましても、武強いっぺんのおかたとばかりみえましたかついえ公までがやさしい恋をむねにひそめていらつしやいましたとは、ついわたくしも存じ寄らなんだこととござります。ひよつとしましたら、これはいろこばかりではなく、三七どのとしばたどのとがしめし合わされ、とくよりひでよし公の御心中を見ぬかれまして、わざとじゃまだてをなされたのもござりましょうか。まあいくぶんかそういう気味がござりましたかもしれませぬ。

なれどもひでよし公へ御さいえんの儀は、じゃまがありましてあ

りませいでまとまる道理はござりませなんだ。おくがたはその御
そうだんをお受けになりましたとき、「藤きちろうはわたしを
めかけにするつもりか」と仰っしゃって、もつてのほかのみけし
きでござりましたとやら。なるほど、ひでよし公には朝日どのと申
すおかたがまえからいらっしゃいますから、そこへおかたづきなさ
れましては、いくら御本妻同様と申してもやはりお妾でござります。
それにのぶなが公御他界の、ちとなりましては、小谷のおしろぜめ
のときいちばんに大功をあらわして浅井どの、御りょうぶんを残ら
ずうばい取ったものも藤吉郎、まんぷく丸どのをだまし討ちにして
串ざしにしたものも藤吉郎、一にも二にも、にくいのは藤きちろう
のしわざだと、おん兄ぎみへのうらみをうつしてひでよし公へいし
ゆをふくんでいらしたかとぞんじます。まして織田家のおん息女
たるお方が、ちかごろきゆうに羽ぶりがよいとは申しながら氏もす
じょうもさだかにしれぬ俄分限者のおめかけなどに、なんとして
なられましようや。どうせ一生やもめをおとしになれぬものなら、
ひでよし公よりはかついえ公をとおぼしめすのは御もつともでござ
ります。そういう次第で、まだはつきりと御決心がついたわけでは
ござりませなんだが、うすくそれが御城中へ知れわたったもので
ござりますから、なおさら御兩人の不和が昂じてしまいました。ぜ
んたいかついえ公の方には、御自分が亡君のあだをむくいるべきお
ん身として、その手がらをよこどりされたそねみがござります。ひ
でよし公には恋のねたみ、りょう地を取られたいこんがござります。
されば御列座のせきにおいてもたがいになれぬ根におちなされ、
一方がこうとおっしゃれば、一方がいやそれはならぬと、眼にかど
たて、あらそわれまして、御れんし御きょうだいをはじめその余の
だいみょう衆までが柴田がたと羽柴がたとにわかれるというありさ

までござりました。そんなことから、御ひょうじょうのさいちゅう
に柴田三左えもん勝政どの勝家公をそつとものかげへまねかれまし
て、いまのまにひでよしを斬っておしまいなされませ、生かしてお
いてはおためになりませぬとさ、やかれましたけれども、さすが勝
いえ公は、こんにちわれく御幼君をもちたて、まいるべきばあい
に、どうし討ちをしては物わらいのたねになるからと仰っしゃって、
おゆるしにならなかつたと申します。それかあらぬか、ひでよし公
も御用心あそばされ、夜中しばく厠へ立つて行かれましたとこ
ろ、丹羽五郎えもんのじょうどのお廊下において秀吉公をよびと
められ、天下にのぞみを持たれますなかつたいえを斬っておしまい
なされと、おなじようなことを申されましたが、何しにかれを敵と
しうぞと、これも御しよういんなさなかつたそうにござります。
なれども長居は無用とおぼしめされましたが、御ひょうじょうが
おわりますと、夜半にきよすをしのんでおたちのきあそばされ、
みのくくに長松をすぎてながはまへおかえりなされまして、一旦は
無事におさまりましたことムリ升。
そのうち三法師ぎみは安土へおうつりなされまして、はせ川丹波守
どの、まえだ玄以斎どのが御守り申し上げ、御成人のあかつきまで
江州において三十万石をお知行あそばし、きよすのおしろには北
畠ちゅうじょうどの、岐阜には三七のぶたか公がおすまいあそばす
ことになりまして、大名しゅうもみなくかたく誓紙をかわされ御
帰国におよばれましたが、おくがたの御さいえんの儀がさだまりま
したのはそのとしの秋のすえでござりました。この御えんだんは三
七どの、おとりもちでござりますから、おくがたはきよすより、か
ついえ公はえちぜんより岐阜のおしろへおこしなされ、かの地にお
いて御祝言がござりまして、それより御夫婦御同道にて姫ぎみたち

をおつれあそばし、ほっこくへおくだりなされました。その前後のことにつきましては、人によつていろ／＼に申し、さま／＼なうわさがござりますけれども、わたくしはそのみぎりお行列のなにくわゝりましてえちぜんへお供いたしましたことゝて、あらまは存じております。当時、ひでよし公がこしいこのお興入れのことをき、およばれ、かついえ公をえちぜんへかえさぬと仰つしやつて長浜へ御出陣あそばされ、おとおりを待ちかまえていらつしやると申す取リ沙汰がもつぱらでござりましたが、いけだ勝入斎どの、おあつかいにておもいとまられましたとも、またそんなことは根もない世上の風説であつたとも申します。もつともひでよし公の御名代として御養子羽柴秀勝公ぎふのおしろへおこしなされ、御祝儀を申しのべられまして、このたび父ひでよしこと、さしさわりのため参賀いたしかねますについては、追つて柴田どの御帰国のさい路次においておまち申しあげ、おんよろこびのしるしまでに一こんさしあげたくと、そういう御口上でござりましたので、かついえ公もこゝろよく御承引なされ、ひでよし公の御饗応をおうけあそばすおやくじょうになつておりました。しかるところ急にえちぜんよりお迎えのかた／＼がにんずを引きつれて駈けつけて来られまして、何かもの／＼しい御そうだんがござりましたが、秀勝公へは使者をもつておことわりにおよばれ、夜中やちゆうにわかには北国おもてへ御ほつそくなされました。さればひでよし公の御けいりやくがござりましたかどうか、わたくしのぞんじておりますところは右のとおりでござります。それにしても、おくがたはどのようなおこゝろもちで御下向ごげこうなされましたか。とかく再縁となりますと、いくらおりっぱな御こんれいでもさびしい気がするものでござります。おくがたも浅井家へおこしいれのみぎりは儀式ばんたんきらびやかなこととでござりました

ろうが、いまはおとしも三十をおこえなされ、かず／＼の御くろうをあそばしたすえに、三人の連れ子をともなわれて雪ふかき越路こしじへおもむかれるのでござります。それが、またどうしたいんねんか、おみちすじまでが此のまえとおなじえきじ駅路をたどつてせきがはらより江北の地へおはいりなされ、なつかしいおだおだにのあたりをおとおりになるではござりませんか。けれどもこのまえはえいらく十一ねん辰どしの春だつたそうでござりますが、こんどはそれより十五六ねんのとしつきをすぎ、秋とはいいいながらも北国はふゆの季節でござります。まして夜中やちゆうにあわた／＼しい御しゅつたつでござりましたから、なんの花やかなこともなく、中にはまた、ひでよし公のぐんぜいが途中でおくがたをいけどりに来るなど、あらぬうわさにまどわされておさわぎになるお女中がたもおられました。のみならず道中のなんじゅうなこと、申したら、おりあしくいぶいぶきおろしがはげしく吹きつけ、すゝむにしたがつてさむさがきびしく、木の本柳ヶ瀬あたりよりみぞれまじりのあめさえふつてまいりけんけんそな山路に人馬のいきもこおるばかりでござりまして、ひめぎみたちや上臈がたのおこゝろぼそさはさぞかしとさつせられました。わたくしなども旅にはわけて不自由な身でござりますからつらさはひとしおでござりましたが、しかしそんなことよりは、このさむぞらに山また山をおこえなされて見もしらぬ国へおいであそばすおくがたのさき／＼をおあんじ申し上げ、なにとぞ御夫婦仲がおんむつまじくまいりますように、このたびこそは幾久敷いくひさしお家もさかえ、共白髪ともしろがのすえまでもおそいとげなされますようにと、たゞそればかりをおいのり申しておりました。なれども、さいわいなことにかついえ公はおもいのほかおやさしいおかたでござりまして、亡君のいもうとごといふことをおわすれなく御たいせつにあそ

ばされましたし、人の恋路をさまたげてまでおもらいなされたづけあつて、ずいぶんかあいがつてお上げなされたので、北の庄のおしろにつかれましてからは、おくがたま日々に打ちとけられ、殿のおなさをしみぐうれしゅうおぼしめしていらつしやいました。そういう風でおもてはさむくとも御殿のうちはなんとなく春めいたこゝちがいたし、まあこれならば御えんぐみあそばしたかいがあつたと、しもぐの者も十年ぶりでうれいのまゆをひらきましたのに、それもほんの束の間でござりまして、もうその年のうちにかつせんがはじまつたのでござります。

最初、かついえ公は此の中のことを水にながして仲直りをなさうとおぼしめされ、御こんれいがござりましてから間もなく、のちの加賀大納言さま利家公、不破の彦三どの、かなもり五郎八どの、ならびに御養子伊賀守どのをお使者になされてかみがたへおつかわしになり、ほうばい同士矛盾におよんでは亡君の御位牌にたいしてももうしわけなくぞんずるゆえ、こんごはじつこんにいたしたいと申されましたので、そのときはひでよし公もたいそうよろこびあそばされ、それがしとても同様に存じておりましたところ、わざ／＼おつかいにてかたじけのうござります、しゆりのすけどののは信長公の御老臣のことでもござれば、なんで違背いたしましょうや、これから万事おさしずをねがいますと、れいのとおり如在な御あいさつでござりまして、お使者のかた／＼を至極にもてなされておかえしになりました。それで殿さまがたは申すまでもなく、わたくしどもまでも御両家おんわぼくの儀をうかゞいまして、もうこのうえはいやなしんぱいもなくなるであらう、おくがたのおん身にもまちがいはなかうと、ほつとむねをなでおろしておりますと、それから一と月とたちませぬうちに、ひでよし公すうまん騎をひき

いて江北へ御しゅつじんなされまして、ながはまじょうを遠巻きなされました。なんでもこれには仔細のありましたことらしく、ひでよし公が北の庄のごけいりやくの裏をかつたのだと申すおかたもござります。なぜかと申しますなら、ほつこくは冬のあいだは雪がふこうござりまして、ぐんぜいをくり出すことができませんから、とうぶんは和ぼくのていにとりつくろい、らいねんの春ゆきだけを待つて岐阜の三七どのとしめしあわされ上方へせめのぼるように、御そうだんがとゝのつておつたのだと申すこととござります。まあどちらがどうやらわたくしどもにはわかりませぬが、当時ながはまには御養子いがかみどのがこもつていらつしやいましたのに、ひごろ勝家公にたいしうらみをふくんでおられましたよしにて、たちまち羽柴がたに同心なされ、おしろをあけわたしてしまわれましたので、上方ぜいはうしおのごとくみのゝくにゝらんによういたし、岐阜のおしろにせめよせたのでござります。北の庄へもしきりに知らせがまいりまして、櫛の歯をひくような注進でござりますけれど、十一月という極寒の折柄、そとはいちめんのおおゆきでござりまして、かついえ公はまいにちくちおしそくに空をおにらみあそばされ、おのれ、猿めがだましおつたか、この雪でさえなくば、わが武略をもつて卵を石になげるよりもやすく上方ぜいをもみつづしてくれようものと、お庭のゆきをさん／＼に蹴ちらして歯がみをなされますので、おくがたははら／＼あそばしますし、おそぼの者はおそろしさにふるえあがるばかりでござりました。羽柴がたのぐんぜいはそのまに破竹のいきおいをもつてみのゝくにをたいはん切りなびけ、岐阜をはだかしろにしましたのがわずか十五六にちのあいだのこととござりまして、三七どのもよぎなく丹羽どのをおたのみなされ降参を申し出られましたところ、なにぶん先君の御連枝の

ことでござりますから秀吉公もかんにんあそばされ、しからば御老母をひとじちにいたゞきますと仰っしゃって、おふくろさまを安土のおしろへおうつし申し、かちどきをあげて上方へお引きとりなされました。

そうこうするうちに天正じゅうねんのとしもくれまして正月をむかえましたけれども、ほっこくはまだかんきがはげしく、雪は一向にきえそうもござりませぬし、かついえ公は「小癩な猿めが」と仰っしゃるかとおもえば、「にくらしい雪めが」と雪を目のかたきにあそばされ、いら／＼なされておられますので、初春の御祝儀も型ばかりでござりましてそれらしい気もいたしませなんだ。ひでよし公の方では、この雪のあいだに柴田がたの大名しゅうを御せいばつなさるおぼしめしとみえ、年があらたまりますとふたゝびたいぐんをもつて勢州へ御しんぱつなされまして滝川左近将監^{しやうげん}どのゝ御りょうぶんを切り潰され、しきりにかつせんのさいちゅうと申すしらせがござりました。さればほっこくも今はしずかでござりますけれども、雪がきえしだいかみがたぜいとの取り合いになるのは必定^{ひつじやう}でござりますので、おしろの中はその御用意にいそがしく、みなさまがそわ／＼しておられます。わたくしなどはこんなばあいになんのお役にもたちませぬから、手もちぶさにしよんぼりといまして炉ばたにすくんでおりましたが、それにつけてもあけくれむねをいためますのは、おくがたのことでござります。あゝ、ほんとうに、このありさまではおち／＼殿さまとおものがたりをあそばす暇もないであろう、せっかくおちつかれたのにこのようなことになるのだつたら、きよすにいらした方がよかったかもしれない、どうか味方が勝ってくれゝばいいが、またしてもこのおしろがし^{修羅}のちまたと化して小谷のようなまわりあわせになるのではないかと、そう

おもうのはわたくしばかりでなく、お女中がたとよるとさわるとそのはなしでござりまして、いや／＼、それでもまさかうちのとのさまがお負けになることはあるまいから、とりこしくろうはせぬものだなどゝ、たがいになぐさめあつておりましたこととござります。

すると、ちやうどこのおりからに、ある日きようごく高次公がおくがたをたよつて北の庄へにげていらつしやいました。むかし、きよすにおいでなされたころは御元服まえでござりましたが、いつのまにかおりっぱな^{冠者}な^者におなりなされ、世が世ならばもういまじぶんはひとかどのおんたいしやうでござりますけれども、のぶなが公の御おんにそむいてぎやくぞくこれとう日向守の味方をなされましたばかりに天地もいれぬ大罪人におなりなされ、ひでよし公の御せんぎがきびしく近江のくにをあちらへのがれこちらへのがれしておられましたところ、このたび江北がさわがしくなるにつれていよ／＼身のおきどころがなくなれまして、ぎりの伯母^{おば}御のおそでにすがろうとおぼしめしたのでござりましよう。わずかにひとりふたりの供をつれられて、みのかさにすがたをかくしおおゆきのなかを山ごしに逃げていらつしやいまして、おしろへおつきなされたときは見るかげもなくおやつれなされていらつたと申すこととござります。それからおくがたの御前へ出られまして、「おそれながらおちう^{落人}どの身をかくまってくださりませ、わたくしのいのちを生かすもころすも伯母うえのおこゝろひとつでござります」と申されましたが、おくがたはその御ようすをつく／＼と御らんあそばし、「そなたはまあ、あさましいことをしてくれました」とおっしゃったきり、しばらくなんのおことばもなく、たゞおんなみだでござりました。しかしそのゝちどういう風にかついえ公へおとりなしをなされましたか、ほかならぬおくがたのお口ぞえでござりますし、あ

けちのざんとうとは申しながら、ひでよし公に追われて来たところ、とのさまもふびんをおかけなされましたか、ではまあゆるしてつかわそうと仰っしゃりまして、おしろにすまわせておかれしました。たかつぐ公がおはつどのと内祝言をなされましたのはこのときのござりまして、わたくし、それにつきましては、うそかほんとうか、或るお女中からおもしろいハなしをうかづっておりま。と申しますのは、たかつぐ公のおのぞみはやはりお茶々どのござりましたけれども、お茶々どのが「浪人ものはいやです」と仰っしゃっておきらいなされましたので、不本意ながらおはつどのをもらわれたのだそうでござります。いったいおちやく御料人とはおちいさいときから氣ぐらいのたかいところがありませんか、こにはやくよりおふくろさまのお手一つで成人なされましたせいか、なか／＼わがまゝでいらつしやいましたから、そのようなこともおつしやつたであらうとおもわれますが、「浪人もの」とあなどられた高次公はさだめし御むねでござりましたろう。のちにせきがはらのかつせんのみぎり、かんとうがたへうらぎりなされましたのも、このときのちじよくをおわすれなく、淀のおんかたへうらみをふくんでいらしたからではござりますまいか。こんなことも邪推でござりましようけれども、もと／＼北の庄へ逃げていらつしやいましたのが、伯母御にたよられるというよりも、きよすのころにおみそめなされたお茶々どのをしたわれて来られたのかとさつせられます。そうでなければ、若狭の太守武田どのは実のいもうと御がかたづいていらつしやいましたのに、なにしにえちぜんへおいでなされましよう。こちらのおくがたは伯母御と申しても義理のおんあいだがら、ことにいまではさいえんのお身のうえと申し、あけちのよるいとして柴田どのをたよられるすじはないのみか、ひとつま

ちがえばさらしくびにもなりかねませぬ。それをおかして、あのゆきのふるなかをこちらへ逃げていらつしやいましたのは、筒井づゝのむかしこいしく、おちやくどのゆえにいのちをまとなされましたか、まあそのへんでござりましたろうが、せつかくそれほどのおのぞみがあだになりましたのは笑止しょうしのいたりでござります。さればもとくおはつどのをおもらいなさるおぼしめしはござりませなんだのに、ときははずみでそうなったのでござりましょうか。もつともこのおりはまだいいなすけのおやくそくばかりでござりまして、御しゆうぎと申しましてもほんのうちわのおさかずきだけでござりました。

さわがしいなかにもこんなおよろこびのありましたのが正月のすえ
か二がつのはじめでござりまして、もうそのころには佐久間げんば
どのがかついえ公のせんぼうとして二まんよきをしたがえられ、の
こんのゆきをふみしだいて江北へ打って出られました。ひでよし公
は伊勢の御陣よりながはまへはせつけられますと、あくるあさはや
く足輕にすがたをかえられ、十人ばかりの古老をめしつれて山の上
へおのぼりなされまして、柴田がたのとりでくをくわしく御らん
になりましたが、あの様子ではとてもたやすくやぶれそうもないぞ、
味方もせいぐしをけんごにこしらえて気永きながにかゝるよりしか
たがないと仰っしゃって、そなえをきびしくあそばされ、きゆうに
はおせめなさりませなんだ。それで双方たいじんのまゝ三月がすぎ、
四がつになりましてからいよくとのさまもやながせ表へ御発向で
ござりました。もはやほっこくもさくらのはながち春のなごりの
おしまれる季せつでござりまして、おこしいれの、ちはじめての御
しゅつじんでござりましたから、うちあわび、かちぐり、こんぶな
ど、おくがたはことにこゝろをこめておさかなの御用意をあそはし、

御主殿しゅでんにおいてかどをおいわいなされました。かついえ公はごきげんよく御酒ごしゅをまいられ、たゞ一戦にてきをほろぼし藤吉郎めのかつびを取って、月のうちにはみやこへのぼってみせようぞ、かならず吉左右きつそうを待つておられよと仰つしやつて、それより中門へたちいでられ、おくがたもそこまでおみくりなされましたが、そのときとのさまが門のほとりに弓杖ゆづきについておたちなされ、お馬にめそうとなされますと、お馬がいなゝきましたので、おくがたのおかおいろがかわつたと申すことでござります。なれども、このおり、岐阜において三七どのがふたゝび上方をてきになされて柴田がたに内応あそばし、やまとの筒井じゅんけいどのも日ならずうらぎりをなさる手筈がきまつておりましたそうでござります。それにひでよし公はちりやくこそすぐれておられましたけれども、武勇にかけてはかついえ公の方にばつぐんのほまれがござりましたし、わけて織田どの、御家老として大名がたも帰服いたされ、としいえ公はじめ佐久間、原、不破、金森のかたゝなど、たのもしき弓取りたちをしたがえておられましたことゝて、たれがあれまでのはいぐんになろうとおもいましうや。やながせ、しずがたけのかつせんしんの始終は三さいの小児しょうにまでも知つてゐることでござりますから、いまさら何を申しましようなれども、かえすゝもくちおしゅうござりますのは玄蕃どの、御油断でござります。あのとときかついえ公のことばをきかれさつそくおひきとりなされまして、そなえをかためていらつしやいましたら、そのうちには順慶どのも打つて出られます、美濃の味方もうしろをつきます、そうなつてくればどうなるいくさともわかりませなんだが、御本陣より馬上のおれきゝを七たびまでも使者にたてられ、きつとおいさめなされましたのに、叔父上はもうろくしてゐるなど、申されて一向おき、いれになりませなん

だので、さしもの大軍も臆おそ次もなくゝずれてしまいました。それにしても御本陣とあの砦とりでとのあいだはまわりみちをしましても五里、まっすぐにまいればわずか一里でござります。かついえ公はたいそう御りつぷくなされたそうでござりますが、それほどならばなぜ御自分でひとはしりあそばされ、げんばどのを引つたてゝ来られませなんだか、いつものはげしい御氣しようにも似合わぬことでござります。もうろくと申すほどでなくとも、うつくしいおくがたをおもらいなされてやはりいくらかこゝろがのびていらつしやいましたか。わたくしまでがあまりの無念さに、ついこんなあくたいを申してみたくるのでござります。

北の庄では卯月うづき廿日にさくま玄蕃どのがてきのとりでを攻めおとされ、なかゞ瀨兵衛尉どの、首を討つたと申すしらせがござりまして、たいそうおよろこびあそばされ、さいさきよしとおぼしめていらつしやいますと、江北の方ではその夜中やちゆうに美濃路よりつゞく海道すじや峰々山々にたいまつひかりがあらわれて廿日の月しるをくまますほどに空をこがし、しだいに万燈会まんとうえのごとくおびたゞしい数になりまして、ひでよし公が大柿おおがきより夜どおしでお馬をかえされたらしく、廿一日の暁あけ天てんにあたつて余吾よごのみずうみのかなたがにわかになさがしく相成あいなり、玄蕃どの、御陣もあやういと申してまいりました。その飛脚のつきましたのが同じ日の末ひつじの刻さがりでござりましたが、そのうちにはや落ち武者がぼつゝ逃げかえつてまいりまして、味方はそうはいばくにおよび、とのさまも御運のすえらしいと申すことでござりました。おしろではあまりのことにおどろきあきれ、よもやとおもつておりますと、日のくれがたに勝家公むぎさんのありさまにて御帰城あそばされ、しばた弥右衛門のじょうどの、小島わかさのかみどの、中村文荷斎どの、徳菴どの

などをおめしになりまして、玄蕃もりまさがわがいつけをまもらぬばかりに越度おちどを取ったぞ、それがし一代のこうみょうもむなしくなつたが、これも前世のいんがであらうとおっしゃって、いまはおかくこのほどもすゞしく、さすがにとりしずつめていらつしやいました。きけば御子息権六どのはどうなされましたか、らんぐんのちまたのことゝて生死のほどもお分りにならず、とのさまもすでに柳ヶ瀬の陣中においてうちじになされまるところを、せめておしろへおかえりになってしずかに御生害あそばしませ、こゝはわたくしがお引きうけたいしますと、毛受勝介どのがたつておすゝめ申しあげましたので、それではと仰っしゃって五幣のお馬じるしを勝介どのにおあずけなされ、府中の利家公のおしろで湯づけをめしあがられまして、それよりいそぎ北の庄へ駆け込まれたのでござります。としいえ公もお供いたしましようにと申されて御いっしょにたちいでられましたけれども、しいて御辞退なされまして途中からおかえしになりましたが、またしばらくしてよびもどされまして、その方はそれがしとちがい筑前のかみとかねぐじつこんにしておられる、それがしへの誓約はもはやこれまでに果たされているから、以来はちくぜんとわぶくして本領をあんとなされたがよい、このほどじゅうの骨おりは勝家うれしくおもいますと仰っしゃってこゝろよくお別れになったと申します。それが廿一日のゆうこくでござりまして、あくる廿二日には堀久太郎どのをせんじんとして上方勢かみがたぜいがひた／＼と北の庄へおしよせてまいり、ひでよし公もやがてとうちやくなされまして愛宕山のうえより諸軍をさしずあそばされ、おしろをすきまもなく取りまかれたのでござります。

このとき御城内においてはどなたも／＼これを最期とおもいきわめたかた／＼ばかりでござりまして、そんなありさまを見ましてもさ

わぐけしきもござりませなんだ。かついえ公はそのまへの晩に御けらいしゆうをおめしになりまして、じぶんはこのしろで寄せ手をひきうけいまひとかつせんして腹をきるつもりだから、じぶんといっしょにとゞまるものはとゞまるがよいが、おやたちが存命のものもあらうし、妻子を置いて来たものもあらう、そういうものはすこしもえんりよにおよばぬから早々に在所ざいしょへ引き取ったがよい、罪なき人をひとりでもよけいころすことは本意でないと仰っしゃって、いとまを取りたいものには取らせ、人質などもそれ／＼ゆるしておやりになりましたので、おしろにのこりましたにんずはたといわずかでござりまして、みな／＼いのちよりも名をおもんずるひと／＼でござります。わけても弥えもんのじょうどの、若狭守どのなど、おれき／＼の衆は申すもおろかでござりますが、若狭どの、一子新五郎どのは十八歳におなりなされ、やまいの床にふせておられましたのに、輿こしにかゝれておしろへはせつけられまして、「小島若狭守が男新五郎十八歳因「病氣」柳瀬表ひ出張せざる也、只今籠城いたし、全「忠孝」と大手の御門のとびらに書きつけられました。もつとお若いおかたでは佐久間十蔵どの、これは十五歳でござりました。利家公の智でいらつしやいましたので、まだ御幼少のことゝ申し、府中のおしろにはお舅さまがおいですから、しのんであらへおたちのきなされませ、なにも籠城あそばさずとも苦しかるまいとぞんじますと、御けらいがいさめしましたけれども、いや／＼、おれは小さいときから引きとられて養育を受けているうゑに莫大な領地をたまわっている、その恩義のあるのが一つ、もししいえのえんじゃでなければ母への孝養こうように生きながらえるみちもあるが、舅のえんにすがって一命をつなぐのは卑怯だとおもうことが一つ、みようじをけがせば先祖にたいしてもうしわけのないのが一つ、こ

の三つの道理に依つてろうじようするのだと申されて、討死のかくごをきめられました。また御定番ごじやうばんの松浦九兵衛尉いどのは法華ほっけの信者でござりまして、小庵しょうあんをむすんで上人しやうじんをひとり住まわせておかれまして、その上人もまつうらのがろうじようなさるのをきかれまして、あなたと愚僧ぐそうとは現世げんせのちぎりがふこうござりましたから、ぜひ来世へもおともをして報恩謝徳ほうおんしゃとくいたしましょうと申され、まつうらのゝとめるのもきかずにおしろへたてこもられました。それから玄久と申すおひと、これは豆腐屋でござりましたが、もつとも以前はかついえ公のおさな馴染なじみでござりましたが、あるときかつせんにふかでを負いましたについて、このからだでは御奉公もなりかねますからおいとまをいたぐきます、もうわたくしも武士をやめて町人になりますと申されましたので、「そうか、それならお前は豆腐屋になれ」と仰っしゃって、大豆を年に百俵ずつ下されました。さればこんどもおともをいたし、来世でおとうふをさしあげるのだと申して、わざくまちかたよりおしろへはいったのでござります。そのほか舞の若太夫、山口一露斎いっろうさい、右筆ゆうひつの上坂大炊助おほひけすけどの、このかたぐものこられました。なかにはみれんなものもおりまして、徳菴とくあんどのは柴田どの、法師武者ひとりの一人といわれ、文荷斎ぶんかさいどのおなじように世に知られた方でござりましたのに、としいえ公のひとじちをぬすみ出されておしろをにげのび、府中へたよって行かれましたけれども、不義理な奴だと仰っしゃってとしいえ公もみけしきをそんぜられ、おちかつけにならなかつたと申しまゐす。そのゝちこのかたはどうなりましたやら。せけんの人がだれもあいてにしませぬので、たいそうおちぶれて都のまちをさまよっておられた姿を見たものがあるとも申します。そうかとおもえば、村上六左えもののじょうどのは、経かたびらを着ておしろにこもつて

おられましたところ、とのさまのおん姉末森殿ならびに御息女をおつれ申してたちのくようにとの御説ごじやうがござりまして、余人に仰せつけくださりませと申されましても、いやく、これはその方にたのむ、それが却つて忠義であるぞと仰っしゃりますので、よんどころなくおふたかたのおともをいたして竹田の里へ逃げられました。が、二十四日のさるの刻に天守にけぶりのあがるのを見られて、おふたかたと御いっしょに自害しておはてなされました。まあわたくしのおぼえておりますのはこれくらいでござりますが、このかたぐはそのころもつばらもてはやしたこととござりますから、さだめし旦那さまも御存じでいらつしやいましょう。いずれもく、かんばしい名をのちの世にまでのこされました奇特なひとたちでござります。

あゝ、わたくしでござりますか。わたくしなどはおりつばなかつたぐの真似は出来ませぬけれども、せんねんおだにのろうじようのおりに捨てるいのちを生きのびておりましたので、いまさらこのよにおもいのこすこともないとぞんじておしろにとゞまつておりましたものゝ、しょうじきを申せば、まだおくがたがどうあそばすともわかりませぬので、そのごせん御先とをみとゞけてからともかくもなろうとおもつておりました。こう申しますとひき卑き怯さうのようでござりますが、おくがたはこちらへ御えんづきなされましてからまるいちねんにもなりませぬ。おだにのときは六ねんのおんちぎりでござりましたのに、それでもお子たちに引かされてながまさ公とおしきわかれをあそばしたのでござりますから、このたびとてもそうならぬとは限りませぬ。それにしても殿さまからそんなおはなしはななものか。かたぎの人質をさえゆるしておやりになりながら、御夫婦と申してもみじかい御えんでござりましたのに、だいおんのある

先君のいもうと御と姪御とを死出のみちづれになさるおつもりか。それともまた、いとおくがたをひでよし公には意地でもわたされぬとおぼしめしていらっしゃるのか。かついえ公ともあろうおかたが此の期になつてめ、しいこともなさるまいから、いまに何とか仰つしやるだろうが。と、そんなふうにかんがえましたのも、じぶんがたすかりたいというころではござりませなんだが、いきるもしぬるもおくがたしだいのいのちときめておりましたのでござります。

寄せ手は廿二日のあさ一番どりの啼くころよりおい／＼取りつめてまいりましたが、御城下の町々、かいどうすじの在々所々を焼きたてましたので、おびた／＼しいけぶりが空にまん／＼といたしまして日のひかりもくらく相成、おしろから四方をながめますと、いちえんに霧のうみのようで何も見えなんだと申します。上方ぜいはこのくらやみをさいわいに、こえをしのばせものおとをころして、おもい／＼に竹たば、たゝみ、板戸などを持ちまして、そうつとちかづいてまいったらしく、そのうちにそとがすこしあかるくなりましたら、さながら蟻のはいよるがごとくお堀のきわへひたと取りついております。城内からはしきりに鉄炮を打ちましてそのへんのてきをみなごろしにいたしましたが、あらてのぐんぜいが入れ代り／＼おしよせてまいりますのをひつしにふせぎましたことゝて、なか／＼けんごに持ちこたえまして、この様子では左右なくやぶられそうもござりませなんだ。そんなぐあいではその日はどちらも手負い死人を出しまして引きとりましたところ、あくる廿三日のあかつき、寄せ手の陣がきゆうに攻めつゝみのおとをひかえてひっそりいたしましたので、何かとおもっておりますと、お堀のむこうに五六騎の武者があらわれまして、「御子息はた権六どの、ならびにさくま

げん六どのを昨夜いけどりにいたしました、おいたわしい儀でござる」とだいおんに呼ばわりしたので、おしろではそれをきくとひとしくみなさまがちからをおとされ、その、ちはたゞ申しわけに御門をかためておりますばかりで、てつぼうなどもはか／＼しくは打ちませなんだ。わたくし、じつは、そのうちにひでよし公よりなにかお使いがありはせぬか、おくがたのことをいまでもおもつていらつしやるなら、きつと、きつと、どなたかお人がみえそうなものだがと、ない／＼それにのぞみをつないでおりましたこととでござりますが、あんのごとくそのときになつておあつかいがござりました。お使者にたゝれましたのはなんと申されるおかたでしたか、お名まえまではわすれましたけれども、お武家ではなくてさる上人がおこしなされたとおぼえております。それでそのおかたの御口上には、ちくぜんのかみこと、昨年以来よぎないしあわせで柴田どのとかせんにおよび、さいわい武運にめぐまれてこゝまでおしよせてまいりましたが、むかしをおもえば総見院さまにおつかえ申した朋輩のあいだがらゆえ、御一命までを申しうけようとは存じませぬ。しゅりのすけどのにおかせられても、しょうはいは弓矢とる身の常、なにごとともまわりあわせとおぼしめされてきょうまでのいしゆを水にながされ、このしろをあけわたして高野山のふもとへたちのいてくださらぬか。そうすれば三万石のりょうぶんをさしあげて一生御扶持申しましようとお仰つしやるのでござりました。なれどもこれはひでよし公の御ほんしんでござりましたかどうか。ちくせんだのはお市御料をいけどりにしたくてそろ／＼おくの手を出しおつたと、味方はもとより敵の陣中でさえそんなひょうばんが立つたくらいでござりまして、此のおあつかいをまじめにきくものはござりませなんだ。ましてとのさまは、おれにこうさんしろなど、はぶれ

いなことを申すやつだと、上人にむかつてれっかのごとくいきどおられまして、勝つも負けるも時の運であるのは申すまでもないこと、それをおのれらにおしえられようか、世が世ならば猿面かんじやめをあべこべに追いつめて腹をきらせてくれようものを、さくまげんばがおれの云いつけを守らなだために賤ヶ岳しずにおいておくれをとり、猿奴にてがらをえさせたのは無念である、たゞこのうえは天守に火をかけて自害をするから、最後の様子をのちの世の手に見ておくがよい、もっとも城には十余年来たくわえておいた玉薬たまぐすりがある、これが燃えたらおびたゞしい死人を出すだろうから、寄せ手はもっと陣をとくへ引いていろ、おれはむやくのせつしようをしたくないからそう云うのだ、かえつたらひでよしにきつとそのむねをつたえておけとおっしゃって、さつさと座を立つてしまわれましたので、お使者もとりつくしまがなくて逃げだされたのでござりました。わたくしそれをきゝましたときは、たった一つのたのみのつなも切れましたことゝて、うらめしいやらなさけないやらでござりましたけれども、こうなつてはむざんやおくがたのおいのちもないにきまった、この上は三途さんずの川のおともをしてすえながくおそばにおいていたゞくとしよう、どうか来世はめあきにうまれておうつくしいおすがたをおがめるようになりたいものだ、自分にとってはそのこそ真如の月のかげだと、そういうふうにかんねんのほぞ観念をかためましたら、それが何よりのぜん善ち智し識きになりまして、死ぬ方がかえつたのしいくらいにおもわれて来たのでござりました。

とのさまも、かくなりはてたのはなんともくちおしいしただけけれども、いまさらとこう云うにもおよばぬ、しよせんこよいはこゝろよくさをくみかわして、あすの夜あけにはしのゝめの雲ともろと

もにきえて行こうとおっしゃってそれぐ御用意をあそばされ、天守をはじめ要所々々へ枯れ草を山のごとくにつみかさねていざといえは火をつけるように手はずをとゝのえられまして、さてあるだけの名酒の樽をのこらず持ってまいれとの御説ごしやうでござりました。そんなしたくをいたしますうちにはや暮れがたになりましたが、てきの陣屋も城中のかくこのほどを見てとりましたか、おいぐかこみをゆるめまして、はるかうしろの方へひきましたので、あれ、あのように寄せ手のかゞり火が遠くなつたぞ、さすがにひでよしはおれのこゝろを知っているなど、世にもすゞしげにおっしゃいましたのが、いつものおこえのようではなくて、とうとくきこえましたこととでござります。御しゅえんがはじまりましたのは宵の西とりのこくごろでござりましたろうか。とのさまがたは申すまでもなく、櫓やぐら々へも樽をおくばりなされまして、おさかなには出来るかぎりのぜいをつくせとお料理方かたへお仰せつけられ、けつこうな珍味のかずぐをそえられましたので、あちらでもこちらでもおもいぐのさかもりになりましたが、わけてもじょうちゅうのひろまにおいては、上段の間のしきがわのうえにとのさまが御座なされまして、おくがたがそれにおならびあそばされ、そのつぎにひめぎみたち、一段ひくいおさしきに文荷さいどの、若狭守どの、弥右衛門尉どのなどおれきぐのしゅうがおひかえなされ、まずとのさまよりおくがたへおさかずきでござりました。奥向きのものもみなぐまいれとの有りがたいおことばがござりましたので、こしもと衆やわたくしどもまでも御しようばんにあずかりましておそばかくにかしこまつておりましたが、どなたもぐこよいが最後でござりますから、とのさまをはじめお侍衆はいろとりぐの鎧よろいひたゝれ、太刀、物具ものぐぐに派手をきそつていぎをたゞされ、お女中がたまきようをかぎりに

われおとらじと晴れの衣裳をおつけになりました、中にもおくがたは、紅、おしろい、かみのあぶらなどひとしおこいめにおたしなみあそばし、しろたえのおんはだえにしらあやのおん小袖をめされ、厚板のきんみがきのおん帯に、きんぎん五しきの浮き模様のあるからおりのうかけの袴はかまをおひきなされていらしたと申します。とのさまはおさかずきを一順おまわしになりますと、「だまってさけばかりのんでおつては気がめいるぞ、明日は浮世にひまをあける身があまりじめくしていると寄せ手の奴ばらにわられる。これから夜どおし風流のあそびをして敵のじんやをおどろかしてやりたいものだ」と仰せられましたところに、はやくも遠くのやぐらの方で、ぽん、ぽん、ぽんとつゞみのおとがひゞきまして、

生きてよも

明日まで人のつらからじ

このゆふぐれを訪へかしな

君を千里において

今も酒を飲み

われと心をなぐさむる

と、たれやら舞をまうらしく、ほがらかなうたいがきこえてまいりましたので、それ、あのものたちに先を越されたぞ、こちらでもあれに負けるなと仰つしゃって、「人間五十年、下天のうちをくらぶれば」と御じぶんがまっさきに敦盛をおうたいなされました。このうたはむかし総見院さまがたいそうおこのみあそばされ、ことに桶狭間おけはざまかつせんのおりにはおんみずからこれをおうたいなされ今川どのをお討ちとりになりましたよしにて、織田家にとつてはめでたいものでござりましたけれども、「にんげん五じふねん、げてんいちどのうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり、一度生を得て滅

せぬものゝあるべきか」と、ろうくたるおこえでいまとのさまがおうたいなさるのをきゝますと、そゞろに先君御在世のころのおんことがしのばれ、さだめなき世のうつりかわりになみだがもおされまして、なみいる勇士のかたぐもよろいのそでをしぼられたこととでござりました。

それより文荷斎どの、一露斎どのが一番ずつおうたいなされ、また若太夫どの、まいなどがござりましたが、そのほかにもなかくおたしなみのふかいおかたがいらいしゃいまして、おさかずきのかずのかさなるにつれ、みなくこの世のまいおさめうたいおさめにたっしゃな芸を御披露におよばれ、遊興のかぎりをつくされますので、御酒宴の席は夜がふけるほどにぎやかに相成、いつ果てることかわかりませなんだ。そのうちに一人、「梨花一枝雨を帯びたるよそほひの、雨を帯びたるよそほひの」と、一座のかたぐがおもわず鳴りをしずめますような美音をはりあげてうたわれましたのは、朝露軒と申される法師武者でござりました。このおかたはなにごとに器用でおいでなされ、琵琶、三味線などもみごとにおひきなされますところから、わたくしもかねてじつこんにねがっておりますので、ふしまわしのたしかなことはとくよりぞんじておりましたなれども、いまの楊貴妃のうたの文句に耳をかたむけておりますと、「雨を帯びたるよそほひの、太液の芙蓉のくれなゐ、未央の柳のみどりも、これにはいかでまさるべき、げにや六宮の粉黛の、顔色のなきもことわりや、顔色のなきもことわりや」と、そうおうたいなされるではござりませんか。もとより朝露軒どのはそのようなおつもりではござりすまいけれども、きいておりますわたくしの身には、おくがたの御きりようをうたっておられるようにしか受け取れませぬので、あゝ、それほどにおうつくしい花のかんばせも、こよいを

かぎりに散っておしまいなさるのかと、この期になつていまだに未練がきざしてくるのでござりました。すると朝露軒どのは、「あれ、あれにおける座頭はしゃみせんを弾きまするぞ、おくがたのおゆるしをいたゞいて、あれにいちばんうたわせてごらんなされ」と申されましたので、「弥市、えんりよすることはないぞ」とすぐとのさまのおこえが、りがござりました。さればわたくしとてもいまは何をか御辞退いたしましたよう、これこそ自分ののぞむところと、さつそく三味線を手にとりまして、「君ゆるなみだはいつもこぼるゝ」とれいの小歌をうたいました。「いや、いつもながら巧者なものだな、ではそれがしも弾いてみよう」と申されて、つぎには朝露軒どのがそのしゃみせんをおとりなされ、

滋賀の浦とて

しほはないが

顔の

ゑくぼは

十五夜の月

と、うたわれますので、わたくしそれをきゝながら、さてもおもしろい文句だわいと存じまして、みゝをすましておりますと、ところぐゝにながい合の手がはいります。朝露軒どのはそのところをいとどのねいろもうるわしくおひきなされましたが、ふと気がつきましたのは、その三味せんのうちに二度もくりかえしてふしぎな手がまじっているのをござりました。さようでござります、これはわたくしども、座頭の三味線ひきものはみなよくぞんじておりますこととでござりますが、すべてしゃみせんには一つの糸に十六のつぼがござりまして、三つの糸にいたしますなら都合四十八ござります。されば初心のかたぐゝがけいこをなされますときはその四十八のつ

ぽに「いろは」の四十八文字をあてゝしるしをつけ、こゝろおぼえに書きとめておかれますので、このみちへおはいりなされた方はどなたも御存知でござりますけれども、とりわけめくら法師どもは、文字が見えませぬかわりには、このしるしをそらでおぼえておりまして、「い」と申せば「い」のおと、「ろ」と申せば「ろ」のおとをすぐにおもひ浮かべますので、座頭同士がめあきの前で内證ばなしをいたしますときには、しゃみせんをひきながらその音をもつて互のおもいをかよわせるものでござります。ところでいまの不思議な合いの手をきいておりますと、

ほおびがあるぞ

おくがたをおすくいもおすてだてはないか

と、そういうふういきこえるのでござります。これはこゝろのまよいではないか、何しにいまごろそんなことを申されるかたがあるものか、よしやそら耳でないにしてからが、たまゝ音の組み合わせがしぜんとなつてゐるまでだと、いくたびもおもいかえしておりますうちに、又もや朝露軒どのは、

いかにせん

わがかよひ路の

関守は

関もゆるさず

なかゝくに

と、うたわれるのをござりましたが、これは三味線もまえとはすっかりちがつておりながら、やはりあの手だけがあいまゝへ挟んであるのでござります。あゝ、さては朝露軒どのは敵方のまわしものか、でなくばちかごろ急に内通なされたのか、いずれにしてもひでよし公のおおせをふくんでおくがたをきにわたそうとしておられ

るのだな、おもわぬときにおもわぬたすけがあらわれたものだが、ひでよし公がまだおあきらめにならなんだとは、なんたるつよい恋だったのかと、にわかにもねをとろかしておりますと、「さあ、弥市、いま一曲その方に所望だ」と申されて、ふたゝびしゃみせんをわたくしの前へ置かれました。それにしてもこのようなめくら法師をさほどたよりになされるのはなにゆえか。おくがたのためとあらば火のなか水のなかをも辞せぬこゝろのおくを、はずかしくも朝露軒どのにいつか見やぶられておりましたことか。もっともわたくし、眼は見えずともお女中がたの中におりますたつたひとりのおとこでござります。それにかずくのお座敷というお座敷、わたり廊下のすみぐゝまでも、眼あきよりよく勝手をそらんじておりまして、まさかの時はねずみより自由にはしれます。おもえばくちようろけんどののはよくも見込んでくだされしよな、あるにかいなきいのちをながらえていたというのもこういうお役にたてたいからだ、このうえはおくがたをおすくい申す手だてをつくして、かなわぬときはおなじけぶりとさえるばかりだと、とっさにしあんをさだめまして、前後のわきまもなく三味せんを取り上げ、

見せばや

君に

知らせばや

こゝろの中と

袖の色を

とうたいながら、わなゝくゆびさきに糸をおさえて、

けぶりをあいづに

てんしゆのしたえおこしなされませ

と、こちら合いの手にことよせまして、「いろは」の音をもって

おこたえ申したのでござります。もちろんいちぎのかたぐゝはたゝわたくしのうたといとゝにきゝほれてばかりおいでなされ、ふたりのあいだにこんなことばがかわされたとは知るよしもござりませなんだが、そのときわたくしはおくがたをおすくい申すについて、一つのけいりやくをおもいついたのでござりました。と申しますのは、こよいとのさま御夫婦は天守の五重へおのぼりなされてこゝろしずかに御自害あそばし、それより用意の枯れ草へ火をつける手はずになつておりました。されば御自害をあそばすまえに、ころあいをうかゞつて火をつけまして、そのさわぎにまぎれて朝露軒どのゝ一味をひきいれましたなら、にんずをもつておふたかたのあいだをへだてることも出来るであらうと、かようにかんがえました次第でござります。

さてもくゝわたくしは、めしいのうえにせいらい至つておくびようでござりまして、かりにもひとさまをあざむくことはよういたしませなんだが、てきがたの間者^{かんじゃ}にかたん^{かたん}をいたしておしるに火をかけ、あまつさえおくがたをぬすみ出そうとくわだてましたとは、われながらおそろしいこゝろでござりましたけれども、これもひとえにおいのちをおたすけ申したいゝちねんゆえでござりますから、つまるところは忠義になるのだとりようけんをきめておりました。そうこういたしますうちに、みなさまおなごりはつきませぬけれども、はつなつの夜のあけやすく、はや遠寺^{とおいでら}のかねがひゞいてまいりお庭の方にほとゝぎすのなくねがきこえましたので、おくがたは料紙^{りょうし}をとりよせられまして、

さらぬだにうちぬる程も夏の夜の

わかれをさそふほとゝぎすかな

と、一首の和歌をあそばされ、つゞいてとのさまも、

夏の夜の夢路はかなきあとの名を

くもゐにあげよやまほとゝぎす

とあそばされまして、文荷さいどのがそれを一同へ御披露におよばれ、「それがしも一首つかまつります」と申されて、

ちぎりあれやすゞしき道に伴ひて

のちの世までも仕へつかへむ

とよまれましたのは、ときに取つて風流のきわみと存ぜられました。それよりいずれも詰め所へおひきとりなされ切腹のおしたくでござりまして、お女中がたやわたくしはおふたかたにおつきそい申し上げ、いよく天守へまいりましたこととござります。もつともわれ／＼は四重までお供を仰せつかり、五重へは姫ぎみたちと文荷斎どのばかりをおつれになりましたが、わたくしはいまがだいじのときとぞんじ、五重へかようはしこの中途までそつとあがつてまいりまして、いきをこらしておりましたこととて、うえの御様子はもれなくうかづつていたのでござります。とのさまは先ず、

「文荷、そのへんをすっかりあけてくれ」

と仰つしやつて、四方のまどをのこらずあけさせられまして、

「あゝ、この風はこゝちよいことだな」

と、あさかぜの吹きとおすおさしきに端坐あそばされ、

「うちわのものでいまいちど別れの酒を酌もうではないか」

と、文荷さいどのおしやくをおたのみなされまして、おくがたやひめぎみたちとあらためておさかずきがござりました。さてそれがすみましたところで、

「お市どの」

と、お呼びなされ、

「きょうまでのだん／＼のこゝろづくしはたいへんうれしくおもい

ます。こういうことになるのだったら、去年のあきにそなたと祝言をするのではなかったが、いまそれをいい出してませんか。ついでにはそれがし、いずこまでも夫婦いっしょにとおもいきわめていたけれども、しかしつく／＼かんがえてみるのに、そなたはそうけんいんさまの妹御であらせられるし、そのうえこゝにいるひめたちは故備前守のわすれがたみのことでもあるから、やはりこれは助ける方が道だとおもう。武士たるものが死んで行くのにおんなこともを連れるにはおよばぬことだ。こゝでそなたをころしたら、かついはいったんの意地かられて義理にんじようをわすれたと、世間のものは云うかも知れぬ。な、この道理をきゝわけてそなたはしろを出てくれぬか。あまり不意のようだけれども、これはよく／＼ふんべつをしたうえのことだ」

と、おもいがけないおことばでござりまして、そう仰つしやるおむねの中はさだめしはらわたもちぎれるほどでござりましたろうけれども、おこえにすこしのくもりさえなく、よどまず云いきられましたのは、さすが剛氣のおん大将でござります。わたくしもそれをきゝましては、あゝ、もつたいないことだ、なさけを知るのがまことの武士とはよく云つたものだ、これほどのおかたとも存ぜずにない／＼おうらみ申していたのは、じぶんこそ下司げすのこんじようだったと、ありがたなみだにかきくれまして、おぼえずおこえの方を両手をあわせておがみましたが、そのときおくがたは、

「きょうというきょうになつて、あまりなことをおつしやいます」

と、云いもおわらず泣きふしておしまいなされ、

「総見院そうけんいんどの御存生のころでさえ、いったん他家へとつぎました身を織田家のものだとおもつたことはござりませぬ。ましてたよるべき兄弟もないこんにちになりまして、おまえさまに捨てられまし

たら、どこへゆくところがござりましょう。死ぬべきおりに死な、いと死ぬにもまさるはずかしめをうけますことは、わたくしもしみぐおぼえがござります。さればさくねんこしいれをいたしましたときから、こんどばかりはどういうことがござりましようとも、二度とおわかれ申すまいとかくごをいたしておりました。はかない御縁でござりましたけれども、夫婦として死なしていたゞけますなら、百年つれそうのも一生、半としつれそうのも一生でござりますものを、出て行けとはうらめしいおことばでござります。どうかこればかりはおゆるしを」

と、そうおっしゃるのが、おんかおにお袖をあてゝいらつしやるらしゅう、とぎれくゝに、たえてはつゞいてもれてまいるのでござります。

「しかし、そなた、この三人のひめたちをふびんとは思わぬのか。これらが死ぬばあさいの血すじはたえてしまふが、それでは故備前守に義理がたゝないではないか」

と、おしかえして仰っしゃいますと、

「浅井のことをさほどにおぼしめしてくださいますか」

と仰っしゃって、いっそうはげしくお泣きなされ、

「わたくしはお供をさせていたゞきますが、そのおこゝろざしにあまえ、せめてこの児たちをたすけてやって、父の菩提をとぶらわせ、またわたくしのなきあとをもとぶらわせて下さいまし」

と仰っしゃるのでござりましたが、こんどはお茶々どのが、

「いえ、いえ、おかあさま、わたくしもお供をさせていたゞきます」

と仰っしゃいましたので、お初どのも小督ことくどのも、おなじように

「わたくしもく」と右と左からおふくろさまにおすがりなされ、

およつたりがいちどにこみあげてお泣きなされました。おもえばむ

かし小谷のときはみなさま御幼少でござりまして、なにごと夢中でいらつしやいましたなれども、いまは末の小ごうどのでさえもはや十をおこえあそばしておいでゝすから、こうなりましてはなだめようもすかしようもござりませなんだ。さればずいぶん御辛抱づよいおくがたもかあいゝかたぐのおんなみだにさそわれてたゞおろくど泣かれますばかりで、わたくし、じつに、十年このかたこんなに取りみだされたのはついぞ存じませなんだことでござります。それにしましてもおいゝ時刻がうつりますことゝて、どうおさまりがつくだろうかとおもつておりますと、文荷さいどのがひざをおすゝめなされまして、

「おひいさまがた、御末練でござりますぞ」

と叱るように申されておふくろさまとお子たちのあいだへ割つてはいられ、

「さ、さ、それではおかあさまのおかくごがにぶります」

と、むりに引きはなそうとなされるのでござりました。わたくしはこのありさまをうかうにつけ、まだとのさまはなんとも仰っしゃいませぬけれども、もはやゆうよしてはおられぬところだとぞんじ、はしこの下につんでありました枯れくさの束たばをひきぬきましてそれへともしびの灯をうつしました。おりから四重のおへやではこしもとしゅうが死にしようぞくをあそばされいっせいにねんぶつをとなえていらつしやいまして、どなたもきがついたかたはござりませなんだので、それをさいわいにこゝかしこの枯れくさの山へ火をつけてまわり、障子、ふすまのきらいなくもえがらを投げちらしまして、われからけぶりにむせびながら、「火事でござります、火事でござります」とさけびごえをあげました。くさがじゅうぶんにかわき、つておりましたところへ、五重の窓がすっかりあいておりましたこ

とって風が下より筒ぬけに吹きあげまして、ぱちくともものゝ干割^{ひわ}れるおとがすさまじく、逃げ場にまよわれるお女中がたのうなりごとと悲鳴とがびゅうくという火災^{かえん}のいぶきといっしょにきこえ出しましたが、「やゝゝ、とのさまのお座所があやういぞ」「御用心めされい、うらぎりものがおりまする」とけぶりの下よりくちくちに呼ばわってあまたのにんずが駈けあがって来られました。それからさきは、朝露軒どのゝ一味とそれを防がれるかたぐとがほのおの中に入りみだれ、たがいにあらそってせまいはしごを五重へのぼろうとなさるらしく、そのこんざつにもまれましてあちらへこづかれこちらへこづかれいたしますうちに、熱いかげがさあつとよえんを吹きかけてはまたさあつと吹きかけてまいり、しだいにいきが出来ないようにになりましたので、おなじ死ぬならおくがたと一つほのおに焼かれないと、しょうねつじごくのくるしみの底にもひっしにおもいきわめまして、はしごへ手をかけたときでござりました。「弥市、このお方を下へおつれ申せ」と、どなたかはぞんじませぬけれども、そう仰っしゃっていきなりわたくしの肩の上へ上臈^{じょうろう}さまをおのせになりました。「おひいさま、おひいさま、おふくろさまはどうあそばしました」と、とっさにわたくしはそう申しましたが、それというのはそのとき背中へおんぶいたしましたのはお茶々どのだということがすぐにわかったからでござります。「おひいさま、おひいさま」と、つづけてお呼び申ししても、お茶々どののはうずまくけぶりに気をうしなっていらいしやいまして、なんとも御へんじがござりませなんだが、それにしてもいまのお侍は、なぜ御自分がひめぎみをおたすけ申さずに、めくらのわたくしへおあずけなされましたことか。おおかたそのお侍は忠義一途にとのさまのおあとをしたい、此処を御じぶんの死に場所とさだめておられたのでござ

りましょうか。さすればわたくしとても、おくがたの御せんどもをみとゞけずに逃げるといふ法はないと、そうおもいましたことでござりますけれども、でもこのお児をおたすけ申さんなら、さぞやおふくろさまがおうらみあそばすことであらう、弥市、おまえはわたしのたいせつなむすめをどこへ捨て、来たのですと、あの世でおとがめをこうむつたら申しわけのまちがない、こうして背中へおのせ申すようになったのはよくくえんというものだからと、そんなふうにもかんがえられましたし、それに、わたくし、ほんとうはそんなことよりも、せなかのうえにぐつたりともたれていらつしやるおちゃくどのゝおんいしき^きへ両手をまわしてしっかりと抱き申しあげました刹那、そのおからだのなまめかしいぐあいがお若いころのおくがたにあまりにも似ていらつしやいますので、なんともふしぎななつかしいこゝちがいたしたのでござります。まごゝしていれば焼け死ぬというかきゆうの場合でござりますのに、どうしてそのようなかんがえをおこしましたやら、まことに人はひよんなときにひよんなりようけんになりますもので、申すもおほずかしい、もったいないことながら、あゝ、そうだった、自分がおしろへ御奉公にあがってはじめておりようじを仰せつかったころには、お手でもおみあしでも、とんと此のとおりに張りきつていらつしたが、なんぼうおうつくしいおくがたでもやはり知らぬまにおとしをめしていらつしたのだと、ふつとそうきがつきましたら、たのしかったおだにの時分のおもいでが糸をくるようにあとからく浮かんてまいるのでござりました。いや、そればかりか、お茶々どのゝやさしい重みを背中にかんじておりますと、なんだか自分までが十年まえの若さにもどつたようにおもわれまして、あさましいことではござりますけれども、このおひいさまにおつかえ申すことが出来たら、お

くがたのおそばにいるのもおなじではないかと、にわかには此の世にみれんがわいて来たのでござります。こうおはなし申しますと、たいへん長いことぐずぐずいたしておりましたようござりますが、そのじつほんのわずかのあいだにこれだけのしあんをめぐらしたのでござりまして、そうと決心がつくよりはやくもうわたくしはけぶりのなかをくぐりぬけ、「おひいさまをおぶっておりますぞ、道をあけて下さりませ」とだいおんによばわりながら、そこはめいござりますからなんのえんりよえしやくもなく人々のあたまをはねのけふみこえて、無二むさんにはしごを駈けおりたのでござります。しかし逃げたのはわたくしばかりではござりませなんだ。おおぜいのものが火の粉をあびてぞろ／＼つながってはしりますので、わたくしもそれといっしょになって、うしろからえい／＼押されながらかけ出しましたが、お堀の橋をこえましたとたんに、がら、がら、がらと、おそろしいひびきがいたしましたのは、うたがいもなくてんしゆの五重がくずれおちるおとでござりました。「あれは天守がおちたんですね」と、だれにきくともなく申しましたら、「そうだ、空に火ばしらが立っている、きつと玉ぐすりに火がついたのだ」と、そばをはしっている人がそう申されるのです。「おくがたやほかのひめぎみたちはどうあそばしたでござりましょう」とたずねますと、「ひめぎみたちはみんな御無事だが、おくがたは惜しいことをしてしまった」と申されるではござりませんか。くわしいわけはあとで知れたのでござりますけれども、その人とならんでしりながらだん／＼話をきくと、朝露軒どのはまっさきに五重へ上って行かれましたところ文荷さいどのがたちまちたくみを見ぬかれまして、「裏ぎり者、何しに来た」というまもらせず斬ってすてられ、はしこのてつぺんからけおとされたと申します。それで一味のかた

ぐも気せいをくじかれましたうえにおい／＼味方の御家らしいしゅうが馳せつけてこられましたので、なか／＼おくがたをうばい取るなどのだんではなく、かえってきりふせられましてやけ死んだものがおおいとのことでござりました。そのおり三人のひめぎみたちはなおもおふくろさまにしがみついていらつしやいましたのを、ぶんかさいどのが早く／＼とせきたてられまして、「このかたぐをおすくい申し敵のじんやへとゞけたものは何よりの忠義であるぞ」と、むらがるにんずの中へつきはなすようになされたので、いあわせたものがおひとかたずつお抱き申しあげて逃げたのだそうで、「だからとのさまとおくがたとはあの火の中でじがいなすつたことだろう、おれはそこまではみとゞけなかったが」と、そう申されるのでござります。「ではほかのひめぎみたちはどこにいらつしやるのです」と申しましたら、「おれたちの仲間が背中に負つてひとあしさにこゝを通つて行つたはずだ。お前のせおっているおひいさまはいちばん強情で、しまいまでおくがたの袖をつかんでなされなかったのをむりやりに抱きあげて誰かの背中へのせたようだったが、その男はまたお前にわたして自分は火の中へとびこんでしまった。なか／＼かんしんな奴だったが、あれはおれたちの仲間ではなかったらしい」と申されるのです。いったい「おれたちの仲間」というのはなんのことかとおもいましたら、^{かみがた}上方ぜいがおくがたをうけとるために天守のちかくへしのびよって、ちよろろけんどのゝあいずを待つておりましたのだそうで、いま此のところをこんなにぞろ／＼逃げてゆくのは、みんな裏ぎりの一味の者かそうでなければ上方ぜいのひと／＼ばかりなのでござりました。「しかしちくぜんのかみどのはせつかくいくさにお勝ちになつても、めざすおくがたに死なれてしまつてはなんにもなるまい。朝露軒どのもあんな

しくじりをやったのだから御前のしゅびがよいはずはない。どうせ生きてはいられなかったよ」と、そのおかたはそう申されて、「それでもお前がこのおひいさまをおつれ申しているうえはいくらかめんぼくが立つわけだから、おれはおまえにくつついてゆくつもりだ」と、そんなことを云い／＼手をひかばかりになされますので、もうさつきからだいぶんつかれてはおりましたけれども、あえぎ／＼いっしょけんめいにはしっておりますと、よいあんばいに敵がたの足軽大将がお乗りものをもっておむかえにまいられまして、とりあえずそれへひめぎみをうつされ、

「座頭、おまえがおつれ申して来たのか」

と申されますから、

「さようでございます」

と申して、いちぶし／＼ゆうをしようじきにおはなしましたところ、

「よし、よし、それならお乗りものについてまいれ」

と申されますので、かず／＼のじんやのあいだを通りまして御本陣へお供いたしました。

お茶々どのはもう御気分もおよろしいようでございますけれども、しばらく御きゆうそくあそばされお手当てをおうけになつていらつしやいますと、たゞちにひでよし公が御たいめんの儀を仰せ出だされ、ほかのひめぎみたちと御いっしょにお座所へおよびいれなされました。それはまあよいといたしまして、わたくしまでがおめしにあずかりましたので、おさしきのそとのいたじきにかしこまつてへいふくいたしますと、

「お、坊主、おれのこえをおぼえているか」

と、いきなりおことばがかゝりました。

「おそれながらよく存じております」

とおこたえ申し上げますと、「そうか、まことに久しぶりであったな」と仰つしやって、

「その方めしいの身といたしてきょうのはたらきは神妙であるぞ。とうざのほうびになんなりとつかわしたいが、のぞみがあるなら申してみろ」

と、おもいのほかの^{じょうしゅび}上首尾でござりますから、わたくしはさながらゆめのこゝちがいたし、

「おぼしめしのほどはかたじけのうござりますけれども、ながねん御恩にあずかりましたおくがたにおわかれ申し、おめ／＼にげてまいりました罰あたり奴がなんで御ほうびをいたゞけましよう。それよりけさの御さいごのことをかんがえますと、むねがいつぱいでございます。たゞこのうえのおねがいは、いまゞでどおりふびんをおかけくださりまして、おひいさまがたに御奉公をつとめさせていたゞけますなら、有りがたいしあわせにぞんじます」

と申しましたら、

「尤ものねがいだ、きゝとゞけてつかわす」

と、さつそくおゆるしがござりまして、

「小谷どのはおきのどくなことをしてしまつたが、こゝにござるひめぎみたちはこれからそれがしが母御にかわつておせわをいたそう。しかしいずれもずんと大きゆうなられたものだ。むかしそれがしの膝のうえに抱かれていたずらをなされたのは、たしかお茶々どのだつたとおもうが」

と、そうおつしやって御きげんよくおわらいなされるのでござりました。

こういうわけでさいわいわたくしは路頭にもまよわず、ひきつゞき

御奉公をいたすことになりましたけれども、じつを申せば、わたくしの一生はもう此のとき、天しようにじゅういちねん卯月二十四日と申すおがたの御さいこの日におわってしまったのでござりまして、おだにや清洲でくらししましたようなたのしい月日はその、ちついでめぐつてもまいりませなんだ。それと申しますのは、てんしゅに火をつけ裏ぎり者のてびきをいたしましたことを姫ぎみたちもおきゝなされましたとみえて、しだいににおにくしみがかゝりまして、なんとなくよそ／＼しくあそばすようになりなされ、とりわけお茶々どのなどは、「この座頭ゆえにおしからぬいのちをたすけられて、おやのかたきの手にわたされた」と、ときにはわたくしへきこえよがしにおっしゃいますので、おそばにつかえておりましても針のむしろにすわるおもいがいたしまして、このくらいならなぜあのおりに死なゝかったかと、たゞもうなされなく、とりつくしまのなしい身のうえをかこつようになったのでござります。もとよりこれも自分が悪事をしでかした罰でござりまして、たれをうらむべきすじもないのでござりますが、いったん死におくれましてはいまさらお跡をしとうたところでおくがたにあわせる顔もござりませぬから、諸人のつまはじきを受けながら生き耻じをさらしておりますうちに、もみりようじも、琴のおあいても、余人に仰せつけられまして、もうわたくしにはとんと御用がないようになってしまいました。ひめぎみたちはその時分安土のおしろに引きとられていらつしやいまして、ひでよし公のおことばがござりましたばかりにいや／＼ながらわたくしを召しつかっておられましたので、それを知りましてはむりにお慈悲にすぎりますこともこゝろぐるしく、もはや辛抱もいたしかねまして、或る日、こつそりと、おいとまごいの御あいさつもいたさずに逃げるようにおしろをぬけて、どこと申すあてもな

くさすらい出たのでござります。

さあ、それがわたくしの三十二のとしでござりました。もつともそのおり都へのぼりまして太閤でんかにおめどおりをねがい、ことの次第を申し上げましたら、一生くうにこまらぬほどのお扶持はいたゞけたでござりましょうけれども、このまゝつみのむくいを受けて世にうずもれてしまおうとおもいきわめまして、それよりきょうまで宿場々々をわたりあるいて旦那さまがたの足こしをもみ、またはふつゝかな芸をもつて旅のつれ／＼をおなぐさめ申し、三十余年のうつりかわりをよそにながめてくらしながら、いんがなことにはまだ死にきれずにおりますようなわけでござります。そういえばお茶々どのは、あのときはあれほど太閤でんかをおうらみあそばされ、「おやのかたき」とまでおっしゃっていらつしやいましたのに、まもなくそのかたきにおん身をおまかせなされ、淀のおしろに住まわれるようになりましたが、わたくしは北の庄のおしろが落ちました日から、いづれそうなるだろうとおもっていたことでござりました。あのみぎり、ひでよし公はお市どのをうばいそこねてたいそう御気色をそんぜられたそうでござりますけれども、わたくしが御前へ出ましたときは案に相違いたしましたすこしもそのような御様子がなかったばかりか、かえってあり難いおことばをさえいたゞきましたのは、お茶々どのを御らんなされましてきゅうにおぼしめしかわつたのでござります。つまりわたくしがほのおの中でかんじましたのとおなじことをおかんがえなされたので、えいゆう／＼うけつのこゝろのうちもけつきよくは凡夫とちがわぬものなのでござりましょう。たゞわたくしはいったんのあやまちから一生おそばにおられぬような境涯におちましたけれども、太閤でんかはあの方の父御をほろぼし、母御をころし、御兄弟をさえ串ざしになさ

れたおん身をもって、いつしかあのお方をわがものにあそばされ、親より子にわたる二代の恋を、おだにのむかしから胸にひそめていらしたおもいを、とうくお遂げなされました。いったいひでよし公はどういう前世のいんねんでござりましたか、のぶなが公のおん血すじのかたぐいをおしたいなされまして、まだこのほかにも蒲生ひだのかみどの、おくがたにのぞみをかけていらしたと申します。このおかたは総見院さまのおんむすめ御でいらつしやいまして、小谷どのには姪御におなりなされ、やはりお顔だちが似ていらしたと申しますから、おおかたそれゆえでござりましたろうか。わたくし、人づてにうかがいましたのには、せんねん飛騨守どのがおかくれなされましたとき、殿下より御後室さまへお使いがござりまして、おぼしめしをつたえられましたけれども、御後室さまは一向おきゝいれがなく、かえつておなげきあそばしておぐしをおろされましたので、蒲生どの、お家が宇都宮へおくにがえになりましたのは、そんなことから御前のしゅびをわるくなされたせいだと申します。それはとにかく、あのお茶々どのがおとしを召すにしたがつてふんべつがおつきなされまして、でんかの御いせいになびかれましてのは、まったく時代じせつとは申しながら、御自分さまのおためにもけつこうなことでござりました。さればわたくしも、淀のおん方と申されるのはあさいどの、一の姫きみだときゝましたときは、どんなにうれしゅうござりましたことか。おふくろさまがあのようにいつも御苦勞をなされましたかわりに、えいがの春がこのお子にめぐって来たのだ、どうか此のおかたゞけはおふくろさまのような目におあいなさらぬようと、たといわが身はあるにかいなき世すぎをいたしておりますも、こゝろは始終おそばにはべつておりますつもりで、そのことはかりおいのり申しておりますたとこ

ろ、そのうちにわかぎみ御誕生と申すうわさがござりましたので、もうこれでゆくすえまでも御運は万々歳であらうと、あんどのおむねをなでゝいたのでござりました。それが、旦那さまも御承知のとおり、けいちよう三ねんの秋に太こうでんかゝおかくれなされ、ほどなくせきがはらのかつせんがござりましてから、またもや世の中がだんくかわつてまいりまして、いちにちくと悲運におなりなされましたのは、なんということでござりましょう。やっぱりおやのかたきのところへ御えんぐみあそばされましたのが、亡きお袋さまのおぼしめしにそむき、不孝のばちをおうけなされたのでござりましょうか。おふくろさまもお子さまも、二代ながらおなじようにお城をまくらに御生害なされましたのも、おもえばふしぎなめぐりあわせでござります。

あゝ、わたくしも、あの大坂の御陣のときまで御奉公をいたしておりましたら、お役にはたちませぬまでも、おだにのおしろでおふくろさまをおなぐさめ申しましたように何やかやと御きげんをとりますむすび、こんどこそ冥土へおともをいたしておくがたへお詫びを申すことも出来ましたでござりましょうに、あのときばかりはつくぐ我が身のふしあわせがうらめしく、まいにちくつぽうのおとをきながらやきもきいたしておりました。それにつけても片桐いちのかみどののはあおのしろぜめに関とう方の味方をなされ、ひでより公と淀のおん方の御座所へむかって大砲を打ちこまれましたのは、なんというなされかたか。あのお方は、むかし志津ヶ岳のいくさに七本槍のひとりとうたわれ、その時分からおとりたてにあずかったでござりまして、ひでよし公にはなみくならぬ御恩をうけていらつしやるはずでござります。世間のうわさでは、太こうでんかゝ御りんじゅうのみぎりにはあのお方をおんまくらべにおよび

なされて、秀頼のことをたのんだぞよと、くれぐれも御ゆいごんあそばされたと申すではござりませぬか。われくのようなにんげんでもそれほど人にたのまれましたら義をたてとおすことぐらいはこゝろえておりますのに、あのおかたは、たかい声では申されませぬが、権現さまの御いせいにへつらつてとよとみ家のだいおんをおわすれなされ、おもてに忠義をよそいながらかんとうがたに内通されていらしたのでござります。いえ、いえ、それは、どなたがなんと申されましようとも、そうにちがいござりませぬ。理くつはつけようでござりますから、いちのかみどの、御苦心をおほめになるかたもござりましようが、かりにも敵がたの大砲の役をひきうけられて、あろうことがあるまいことか、お主のわかぎみと北の方のいらつしやるところへ玉をうちこむようなおかたが、なんで忠臣でござりましようぞ。うき世をすためくらあんまにもそのくらいなことはわかります。それゆえあのときはいちのかみどのがにく、てにく、て、眼さえみえたら、陣中へしのびこんで一と太刀なりとおうらみ申したいとおもったほどでござりました。

にくいと申せば、せきがはらのときに大津でうらぎりをなされました京極さいしやうどの、仕打ちなども、はらが立つてなりませなんだ。あのおかたはお初御料人（ごりようにん）と内祝言をあそばしながら、かみがたぜいの攻めよせるまえに北の庄をお逃げなされて、若狭の武田家へたよつていらつしやいましたところ、そのたけだどのもほろぼされましてからは三界にすむ家もなく、木の根くさの根にもこゝろをおいてあちこちさまよつていらつしやいましたのが、ようくのことでお詫びがかなつて大名衆のれつにくわえていたゞけたのは、どなたのおかげだとおぼします。もとの武田どの、おくがたが松の丸どのと申されていらつしやいましたから、そのおかたのおとり

なしもござりましたろうけれども、何よりも淀のおんかたにつながる御えんがあつたればこそではござりませぬか。いちどは小谷どの、お袖にすがられ、つぎにはそのお子さまのなさけにたよられ、二度までもあやういゝのちをたすけておもらいなされながら、あの大雪のなかを落ちていらつた当時のことをおわすれなされ、だいじのせとぎわにむほんをなされて大坂ぜいのあしなみをみだされるとは。あゝ、あゝ、しかし、いまさらそんなことを申したところで仕方がござりませぬ。かぞえたてればくやしいことやうらしいことはいくらでもござりますけれども、さしやうどのも、いちのかみどのも、もはやあの世へおいでなされ、権現さまさえ御他界あそばされましたこんにちとなりましては、なにごとともすぎにしころの夢でござります。おもえばくおりっぱなかくがみなく、おかくれなされましたのに、わたくしはこのさきいつまで老いさらばえておりますこととござりましよう。げんきてん（元龜）し（正）の昔よりずいぶんながい世間をわたつてまいりましたので、もう後生をねがうよりほかのことはござりませぬが、たゞこのはなしをいっぺんとなたかにきいていたゞきたかったのでござります。はい、はい、なんでござります。おくがたのおこえがいまでも耳にのこっているかと仰つしやいますか。それはもう申すまでもないこと。何かの折におつしやいましたおことばのふしぐ、またはお琴をあそばしながらおうたいなされました唱歌（しょうか）のおこえなど、はれやかなうちにもえんなるうるおいをお持ちなされて、うぐいすの甲（かん）だかい張りのあるねいろと、鳩のほろくくと啼くふくみこえとを一つにしたようなたえなるおんせいでいらつしやいましたが、お茶々どのもそれにそつくりのおこえをなされ、おそばのものがいつもきゝちがえたくらいでござりました。さればわたくしには太閤殿下がどんなに淀のおん

方を御ちようあいあそばされましたかよくわかるのでござります。太こうでんかのおえらいことはどなたも御ぞんじでござりますが、そういうふかいおむねのなかを早くよりおさし申しておりますのは、はゞかりながらわたくしだけでござります。あゝ、わたくしも、あれほどのおかたの御心中を知っていたかとおもえば、かたじけなくも右大臣ひでより公のおん母君、淀のおんかたをこの背中へおのせ申したことがあるかとおもえば、なんの、なんの、この世にみれんがござりましょう。いゝえ、旦那さま、もうじゅうぶんでござります。つゝたゞきすござりまして、つまらぬ老いのくりごとをながくとおきかせいたしました。家には女房もおりますけれども、おんな子供にもこうまでくわしくはなしたことはござりませぬ。どうぞ、どうぞ、こういうあわれなめくら法師がおりましたことを書きとめて下さいまして、のちの世の語りぐさにしていたゞけましたらありがとうございます。さあ、もうおおさめ下さりませ。あまり更けませぬうちにすこしお腰をもませていたゞきます。

おわり

○右盲目物語一卷後人作為の如くなれども尤も其の由来なきに非ず三位中将忠吉卿御代清洲朝日村柿屋喜左衛門祖父物語一名朝日物語に云う「太閤ト柴田修理ト取合ハ其比威勢アラソイトモ云又信長公ノ御妹オ市御料人ノイハレトモ申ナリ淀殿ノ御母儀ナリ近江ノ国浅井力妻ナリケル云々天下一ノ美人ノキコヘアリケレバ太閤御望ヲカケラレシニ柴田岐阜ヘ参リ三七殿ト心ヲ合セオイチ御料ヲムカエ取オノレカ妻トス太閤コノヨシ聞召柴田ヲ越前ヘ帰スマシトテ江州長浜ヘ出陣云々」又いう「柴田北ノ庄ヘコモラレケレバ太閤僧ヲ使トシイニシヘノ傍輩ナリ一命ヲ助ヘシ云々はハスカシテオイチ御料ヲトラントノハカリコト成ヘシト其沙汰人口ニマチマチナリ」

○佐久間軍記（佐久間常閑物語）勝家祝言の条に云う「浅井長政ノ後室ヲ嫁勝家ニ勝家其息女三人トモニ携越前ニ歸ルノ時秀吉走勝家于使ニ曰於歸国道ニ使秀勝（信長四男秀吉養子）一饌膳祝儀ヲ可レ賀ト勝家慶テ約諾ス然シテ勝家ノ家人等北庄ヲ発清洲迄ノ行路ニ来迎勝家夜半ニ清洲ヲ出告ニ秀勝ニ曰越前ニ急用アルヲ以テ道ヲカネテ夜半ニ此前ヲ通ル間ニ能レ心レ招云々」

○志津ヶ岳合戦事小須賀九兵衛話には清洲會議を安土に作る、当時「挨拶及相違て柴田と太閤互に怒をふくむ其時丹羽長秀太閤と一処に寐ころひ有しか長秀そと足にて太閤に心を付太閤被心得其夜大坂へ御かへり云々」佐久間軍記には「秀吉其夜屢小便ニヲクル」とあり然れどもこれらのこと甫庵太閤記等には見えず不審也

○蒲生氏郷後室の墓は今京都の百万遍智恩寺境内に在り、寛永十八年五月九日於京都病没、行年八十一歳、法名相応院殿月桂凉心英譽清薫大禪定尼、秀吉此の後室の容顏秀麗なるを知り氏郷の死後迎

えて妾となさんとしたれども後室これを聴かず、ために蒲生家は会津百万石より宇都宮十八万石に移さる、委しくは氏郷記近江日野町誌を可レ見

○三味線は永禄年中琉球より渡来したること通説なれどもこれを小唄に合せて弾きたるは寛永頃より始まる由高野辰之博士の日本歌謡史に記載あり尤も天文年中既に遊女の手弄ばれたること室町殿日記に見え好事家は早くより流行歌に用いたる趣同じく右歌謡史に委し、此の物語の盲人の如きも好事家の一人たりし歟、予が三絃の師匠菊原檢校は大阪の人にして今は殆ど廃絶したる古き三味線の組歌を心得られたるが其の中に閑吟集に載せたる「木幡山路に行きくれて月を伏見の草枕」の歌長崎のサンタマリヤの歌其の他珍しき歌詞少からず予も嘗てこれを聞きたることあり詞は短きようなれども同じ句を幾度も繰り返して唄い且三味線の合いの手は詞よりも数倍長し曲に依りては殆ど琵琶をきく如き心地す

○かんどころのしるしに「いろは」を用いることはいつの頃より始まりしか不レ知今も浄瑠璃の三味線ひきは用之由予が友人にして斯道に明かなる九里道柳子の語る所也、本文挿絵は道柳子図して予に贈らる

于時昭和辛未年夏日

於高野山千手院合しるす